校正
首書 紫式部日記
全

鈴木弘恭大人校訂

校正
首書

紫式部日記

東京書林　青山清吉藏版

石崎文庫

後あつめて、物がたりもとをたゞしたる後補ひ、おの
れ、やまとの国の二、三のもとあるべし。しかるに本文、一
つは異本なるべし。そのよき後撰をえらびて、
らの物がたり。或いと後ふの和歌のみをもてよ
かゝうへ、しるしたりと。さて新本し限りあれいこと
くなりぬ。あへて、ある所、物がたりあるをいうはせむ。
今、和のしの校正りの中みる書ハ類本、雅古新院
校本、新本、足川武元校為家本、長慶自筆
のこれらをもて新本、足川武元本の写の古編本のこれらを新本、法名宗祇
俗名藤原の定家卿の新本、
俗本、富井義和の
注和のふれ、をもて考りて加へつゝ、そのその校正

しるしあるをハ、悪くそのまゝにたゞしたるも
のゆゑ、校正を書のもとを記号れ、りか
ふるせあるなるべし。ほこりひまゝ、をくへ、かゝる
りをもて、とゝ世ちりこゝはまゝりぬ。
おもひたゝかゝはもの陸奥の新本。

明治二十七年十月　十六条主人　法治

校正 首書紫式部日記

故人　紫式部　著
東京　鈴木弘恭　校正

土御門殿　関白道長公の邸之土御門の南烏丸の西よ
り、

おとゝゐ　類本枝本ハ
おとゐんとあ
り又栄花初花
の巻ハおとゝ
ゐどよ作れど
取らず

あやしき　歌云あやしき

一條天皇ノ寛弘五年ノ秋七月ノ

秋のけはひのようつまくに。土御門殿は有さまいとゝうとくをもゝしろし。池
乃ほとりは木ども高くなりて。やり水乃水乃ほとりの景村。おのがちゝにあつきわさ
りつゝ。おほうらは空もえんなるにあてきやかれて。ふぐんの法読経ときやや
うれゝゝ。あをれまさりけり。やうゝゝすゞしき風乃きゝはじめるも。
いのたえぜぬ水のおとゝゐひ。夜もすがらきゝまがはさる。法ます中宮御前へ悩りもち
ゐたゝゝまもべうめるをぱりげなくもてなくさせ給へり。法ありさまも
どのいとさゝなる事なれど。浮世はなぐさめふ。うゝ敷法ます〳〵をこそ
さゞねまゐるべうりなれとうつゝしん様ばひきたゞ〳〵。あとゝ〳〵あくよ
ろゞびとすゝもゝ。ゆいあやしきまで夜ふるまゝにかどは月さゝくもり。

のきゝど衍欠師云あやしきことゝいふ歟意の意を含めたるなるべし

五だんのほうず　不動降三世軍荼利大威徳金剛夜叉等法也

おやう衣　諸本おやうえとあるハ誤え今数本によりて改めつ

木ども　ものさをぐらきまで。ほうう〜しまゐりあるぞや。女宮ハいまぞさふらひ。

藏人まゐれなどいひもろふほどよ。後歟れうまうちたどころ〜。みだん壇

のほうず修法わう時ぢめ。我もく〜とうちあげるばんどうの声々。ほ

くちうく〜わさされる程。あどろ〜〜〜さふと〜。観音院の僧餘

慶。正覚院。ぐ〜ろ。いよう。世人の僧をひきあてほうちまゐり給ふあ〜加持

あとわ。渡殿。ぐ〜ろ。ぐ〜とふ。ぐ〜ろ。ぐ〜さる。ぐ〜さへ。ぐ。ことく事

ぬきもそひまハに。法住寺ハ産屋。うまゐのあしぐ。産んぢ。ぬ僧都ハ。殿遊昭寺

文殿ぬどのなどに。うちつまる。ぐやう衣すがゝまで。ゆ。ゐ〜〜きめ。そ威徳

しども。沢。ろう。水ハ。沢わけてのへりいるわどもなるうふ見や阿闍利

ら〜ま〜ちしてあそれなり。清禅さいざあざうも。大。あと〜をうやまひて。

あ〜をう〜めう。ぐ〜まゐりつ。ぢ。ば。ぬもあきぬ。ぬ。殿。ぬ。戸ぐちのつ

ぢ〜にみいざせぶ。ぬのうちまう。ぬ。ぬ。ぬ

哥小野良材女郎花にほふる野べよやどりをばあやなく名をやたてんの立たん」

播磨守類本ハ修誌ヨ行成とあれど按ヨ義孫有国ろるべし

きのくまの洲濱ヨあきまぜたりし古歌かり

經房諸本護房ヨ作るハ非ん類本ハ經ヨあり公

めくるをとこれあくちしらしらかぞうれしうのうちにもひ出らるもありうのをりいをこのしきもとのすぎぬまバヨするもあいろ形るぞそうはのうこ。碁このまけわざしけるヨ。武部ぐんあうさはまうでく坂よぞごぞんのさはなどこ絵へしうバ。華足けそくなどゆゑくしくしうもそ洲濱はとりの水ヨうれまぜうり。

きのくまの洲濱ヨあきまぜたりしこの歌ハ岩波ともあれ

あふぎどものをうしきをそのころハ人ことをうり」八月廿日あまりれ程ありハかんぞちめ殿上人どもさるべきふこ宿直のねぐちあそこしのうへうしいの黄瀬子などこ。ろ形ううあそび所うもあとふえの笛音ものあどこにハたとうぐしきとろ人ウトうちれこ遊戯ヨ名ありそひいまやううこどのう。而よつきそハをうしうけり。宮大夫斉信なりのふ左宰相中將經房。左兵衛督資成。清政ヨ將なりまさるどしてあそびのふ歌もあり。わぎこの巳あそびい殿おぼをやうやあうんせこせしまそびせ

卿補任を按るヨ類本に從ふへし

左兵衛督諸本左もドなし栄花ヨハあり是れ実成卿ハ當官左兵衛督なれバ栄花ヨ從ふべし

そのころハ傍本ヨそのいろハとあるハ誤え諸本皆本文の如し

傍本ヨめり傍本ヨとあれど諸本皆本文の如し

兵衛のおもと類本扶本ヨハ

しにさとみしるる人くれ女房中絶をとひあこしつ。まりつどふけそひさうどうそうのころハ志めやうること形し」。廿六日ハ薫物さきものあらせそ。人こ見もくばらせそ。ゆろがしみるひとくあまさつどひみうり。うへよりおそて。道ヨ。女房弁宰相の君の戸口をさしのぞきたまぶ。ひられし話へる程どなりうりそ。教紫苑志をんいろくこ乃きぬこ。

擣目

ぬぐうち絶ん。ことなる様うへよきそうハひきいまあ。をぐりれそうよ。ゆくらしそうひつきいとらうふげよるまあ。し。絵より紀ふる物の姫君のまくちすれバ。くちあるひを引やりて。ゆのぐさ式詞より紀女のこうちもしのくるうるといつよ。見あげて。拍くるほしのはさはや。稲ふる人をまくろなくれどろくをものうとそ。すこし。わきあぐり話へるうるのうちあこ話聞るなどあはうよをうしうそ話」。れ。れうこもうき人の形くうに。ゆこまれくすきるわざるりきり」。九月きくれまこを。兵衛ハ兵詞もとのもてきそ。あれこのくうへのとりわ

兵部のおもとと有

菊の露云々
此の歌二三の句紫式部集共新勅撰集賀部よハわうゆばうりよ袖ふれてとあり

白き御帳
御産御調度奉中宮白木御帳一基云々と御

ゐもとゐき
弘云こは上のをうーさとあるを對してゐもとゐきとあり白き所ゐきハさの行欲

産部類記よあり

たちさわぎて
類本扶本彦本よいおほくさはきてとあり

御もの〜け
當時の風俗よて或ハ御産の時或ハ御病の時など物怪を駈除するとてかくするゑ

いろのよろこび
傍本いろのよろきりとあり今類本扶本よるひきつぼね

諸本ひきまて句と志たるハ非ゑつぎけてよむべし
師云ひきつぼねハ引廻して囲ふことなり

たのうみ云々
傍本たのみう

きていとうれいのごひすてゑ〜とのゑいせつるとあれば。

式
菊の露わくるゐりに袖ぬれて花のあるゐに手代ハ思ひらん」

とそこの歌ーきんとするゐどに。あるさにくくりまうせゑひぬと

あれば。ようゐさにそぐめ川」を敢さりにまくりまゐりられば。月を

うーきゐどうそはーまゐにさの志〜ゐ。ものすそなどゐにころびい

づる。ゐどくまこ少ねの君。大納言の君などさゐ〜ひゑふ。ゑひとりよ

ゐとひのゐ紀ものの。薫物そうでく。あ〜ゐろこさせゑふ。ゑまくのありさゐゐを

うーさ。ゑ葛この紀れんゐとゐきなど。さ紙くちくーきこえさするふ。まいより

をたゐやまーきさゑ帝ーきゐりおいーませだ。ゑ加持ゐどもこゐゐるゐこ

ゐり。ゑゐどーきあくちーそいりぬ。人のゐべバつぎよにおりて。ゐどーし

とおりひーゐどれよゐり。夜中ぎゐりゐ。さる紀ゐちてのくーゐ室」十日

のゐぎゐのぐとするに。ゑ志川ゐ札いゐる。白紀ゑ帳ゐゐつゐを。ゑ道公厳

ゐりゐど紀ゐりて。きんぐゐ。四位五位どもゐちさわ紀て。ゑ帳ゐりゐさび

ちうけ。ゑ座ーどもをてちぐふ。ゑ紀いとさるぐー。日記十日とひいとてゐ

ゐとゐげよ。あきふーくーさせ。ゑひつ。ゑ物ものくけ怪どもゐりゐつー。かぎ

りゐくさるぎのくーゐ。月ゐゐゐゐゐさふゐひつるゐ。ゐ殿くゐ中ちのゐう

とび。さーゐにもいそぎ。山ゐてゐくーを尋て。ぎんざ験者といふゐぎりハのこ

りなくまゐりつどひ。三世の佛もいゐゐゐきくゐ。ゐふゐんとゐひゐられ。

おんやう陰陽師ーとて。世ゐあゐゐぎり。夜ーあつめて。やほ八百万よゐ沙の紙も。

ゐくふ耳振立ぬハあゐどとゐえきゐ。こぐぎ御誦経ゐうのゐゐゐひゐちさ

ゐ紀くゐらーき。夜もあきぬ。ゑ帳の内んぐーあめてハ。ゐちれ女房まゐ内裏

りつどひてゐちゐ。ゐ。ゐーにハ。ゑものくけゐりゐる人ゐ。ゑ屏風ぐやうぶ

一雙ひとゐろひ。ゑ紀ひきつぐ。くーくちゐハ几帳をゐそつ。げんざあぐゐ

りくーのくゐりゐゐり。ゐるゐにい。やんどゐるき。僧正。僧都ゐゐりゐ

て。ゐ不動尊どりそむのいき紀ゐるかゐちをも。よびいぞあゐりーつぐゐ。ゐの

ゐみ。ゐらくく。ゐ志ゐふゐれゐりにゐるいとゐくぐゐうきゐ。ゐの志

らみとあり今類本技本叡本ニ従ひつ

中々ゐこめられず

叡本ニ中くハ出ヨの誤ル べしとあり 師説も中ニのうさ然るべしとなれり

曹司

ざうしと内帳とのえだ間。いとせば狭ども紀ども四十ニ人ぞ侍ふめる。いとこそもせこれば。きあがりてのぞいがれば。おそりなる。いさゝうしろさもせこれば。きあがりてのぞいがえぬや。今内とりまゐる人くい中ゝ。めこめられぬ。をのすり。さぬの袖ゆづらんうさも。ちらぶ。さるべきたとなるゐどハ。志のびてなきほどふ。十一日ばかりつきぬ。ふの内さうしど二間をもちて。ひさ庇しまうらせ給ふ。内簾などもえうけあへねば。内几帳ばかりおしかさねておりゐ。中宮人まゐ。僧都法務ぎやうてふ。そうげ。ゐうむそうげ。ゐどさうひてかれまゐる。院源そうげ。さのふうせ給ふ内記書ニ。いみじき事どもかきくハへてよみあげつゞけるこの紫のあそきまたふとく。たのもしげなることかぎりなし。道公ゐ紀ニ。そのゝ。うちそへて仏経ん供どさえ給ふ。ゐどのゐのゝ。さりともこハ。ゐびゐどゐ。いゝしうかるゝ。きりゝくゐ。ぶ紀えゐゝあへぞ。ゆゝしうかうなどかゝにいひゐどゝぞえせきあへぐりゐる。人けおほくゐみてい。いとど内ゐゐもくゐまうおいゝまをらんとてみゐ

みゐみ諸本ゐもての三字なし今技本ニよりて補ひつ

ゐゐゝゐ御堂殿の御墓呼倫子の方ゝさぬき以下ハその女房ゝ

内侍のゐみ

内侍のゐゝハ尚侍ないしのかみ又内侍のすけハ典侍ないしのすけ又内侍ハ是掌侍ないしのじょう下皆倣之

いと姫君

いと姫とハ最末の御女をいふ称ゝ栄花ニ

えゐもて来ゐもてよいどさせ給ふて。さるべきさうぞくおれ二まれりとに。ハさふらふ。倫子ゐゝ。さぬきと。宰相君。内蔵命婦。内几帳のうちに。仁和寺のそうげの君。三井寺供内ぐの君もめしいれさうぞのゝ。ゐろ。御僧げみのゝ。ゐゝせ給ふ内ゝ。ゐよろうもけふれてゐとせぬやうなり。いま一ざうゐゐる人ゝ。大納言の君ゝ。少将の君。式部おいゝ。年の内侍。中務の宣旨君。たいふの命婦。大式部のおもと。ゐのせんどよいとせゝ。へゐる人ゝのかぎりゐて。ゐを。ゐどいゝゐるけゝきどもの。いとあとさりなるにまぎれ。ゐりゐるゐどゐれど。ゐぐひゐぐいゝゝゝとゐひとゐよおゐゐ。まさゐのうゝゐのきハよゝてゐる。几帳外きちやうのとよ。内侍妍子のうゝの中務のめのと。威子姫君の少納言乃めのと。いとひめ君小式部のゝ志ますのめのとゐど。

御帳二

おゝいりきて。みちやうふ。ゐゐ。ゐぐうゝゐ。ゐれ後ゐゝちを。ゐ人もとほらぬ。

中ゐゐ兼隆ゐ四位の少ゐ推さ通など。ゐばハ内ゐにもいゐ。左宰相中ゐ

第姫君とあり おと姫もいと姫も同言ゝ倫子の御腹まハこれぞ最末の御女ゝけるうちよきの 傍本扶本まハうちゆきをとあり今類本釈本まに従て改めつ

経房中宮斉信の大夫なども。きいハけどほき人ゝさへ。内几帳のうしろより。ものすれバのぞ紀つゝ。なまてるめ目どもを見ゆるもよろづ目すれとうゝ。いゝ紀まハ。うちまき紀の雪ぬやうに。ふりかゝり。おゝ。ちぶ。たるさまの。散米ゝ紀まハ。うちまき紀の雪ぬやうに。ふりかゝり。おゝ。ちぶ。たるさまの。散米

いゝまハ。ぐゝ。うりをんとのちにぞをうゝ。きゝ」内いゝぐきの内ぐゝ。髪おゝ。うりをり。内いむ。受戒とうけさせなり。ふ。ゆどくれ。女房達まどひしるこゝちまこ。ハいゝなるとゝあさ内ゝうゝ。ふゝ。ふたいらうゝ。ふ。せさせ。ゝて。のちけ。胞衣とまぐゝ紀ゝるどさぞゝるをひろきを。母屋やの南ひさゝ。がうらんのゆどま。で。ゝちこゝゝる僧もぞく。俗もいまひとりとよみてぬうをゆく」ひんが。ゝもてなる人ゝハ。殿上人まぐゝとるやうにて。こ中ねの君の。左頭。中ねふゝあゝせて。あきれゝうゝ。さ内ゆ。ぼまぞ人ゝいひ出てゝゝふ。頼定。假粧。けさうるどのゝるゝ。なくなまめうゝ。きゝ人まて。あうつきにうゆづくり。ゝうりゝる紀。なきゝれ涙ゝこゝろぐゝぬきそゝゝられて。あさ内ゝうを人とゝんまゝえざりゝ。宰相の君の。うゆ。がうり。宴ゝ。ゝ紀へるさまゝるどさ。

人の心 類本扶本まは心のもとなし

そうそ 僧名なるべし 傍本まハ此間脱字あるうと有

そいとめづらうに侍ゝうゝ。まゝていうなりけんされどうのきゝまゝ。ゝみゝ人のゝありさ内のうゝみまおゝゆゝえざりゝ。ゝなんかゝ。こうりゝ。今とせきゝせ紀ふゆど。内まめゝけれねゝまのゝゝるゝ。ゝゝるどのゝむくつゆ内。のくゝら人まハ。ゆうちうゝ。のゝ。ゝ。法住寺律師。ゝ。ゝの内侍のつゆゝまハ。ちそうあぎ。源。けんの藏人まハ。ゝん心誉よあぎうゝ。ゝ。ゝ。ゝくゝ人まハ。ゝうゝゝ。ゝゝといふ人。右近。りゝとあづあゝれバ。まめゝ。物怪。けまひきゝふされていとくゝ。ゝうゝれ。で。紀んうくあぎりをめゝくゝ人てゝのゝゝる。あぎりけきん験のうすき。にあらぬ。内のゝけのいゝゝうあゝ紀なり。強。宰相の君をき人まゝ。ゝ。ゝのゝけうゝ。ゝとめゝいてゝる人ゝもゝる。ゝつらでさゝゆれうゝ。十一日ゝ。中の時まゝ空ゝれて。あゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝる心地ゝたひらゝふれゝゝます。ゝれゝゝされゝゝぐひもゝ紀まを。男子御誕生後一條院へ。ゝとこにゝさへ。あゝゝゝます。ゝるゝゝろこひ。ゝうぐハゝめゝ。ゝん。昨日ゝをれくゝゝ。けさのゆどあさゝうにおゆ

おほられ
傍本おほられとあり諸本皆本文の如し

きき〻〻〻〻きさふらふ
こはきき〻〻〻きと云意之詞を省たるまゝ

給らべし
諸本ふすべしなし 叡本よりて加へつ

はれつる女房などゝるたちあれつゝやまむ。中宮 ゆふうちねびさる人くれぬ。老 れをりふしはきゝ〻〻紀さふらふ。道公 倫子 もうへもあるさに。御修法 読経 ふらふ。僧 布施 医師 ひくらし。おんやうしなどゝ。ちてまゐりつどひつる。ろうれふせ給ひくれ。ろく。緑 給てあらはれる。ろく給たせ。うちすはは湯殿れぞ紀など。

儲 ゐてまうけさせ給へべし。へのつぼよ〻くまゐ御きやうれるぬく。ろつ〻〻こどももてちぐひ。唐衣 鋪 ぬ。ぬひめ〻を。裏 きむすび。螺鈿 らてんぬひ物。ゝ〻〻ぬまでしてひきかくし。あふぎめてきぬゝなどいひゝ〻つ。けちうしはくろふきいのはとゝ殿よりゝやまぶつまどのまへよ。宮の大夫 斉信 書 懐平 の大夫などゝ。ぬ上達部もちふしひとゝ。道公 殿いでさせ給てひごろうづもれつるやり水つくろはせ。ひくこれはけきどもあ〻ちよげなり。んのうちよれもふとあらん人。たくいまゐはぎれぬべき世のけもひなる中にも。大夫 あとちうゐもゝ。ゝ給

徳子
傍本よつな子とあるハ非 御堂記よりて改めつ

ゝるど。人ゝうゝ。ゝ給よ以づるぎあとゝ。
兼隆 俊賢 ゐる。右宰相中将ハ。権中納言とたゝふれしてゐいの。資子 きこにぬ給へり。
内よりはたゝ。佩刀 もてまゐれり。改中将 頼定 まゐりさゝ。ゝふ伊勢のこてぐら。
使 給ひ。ゝるかどのゐるまゐ。ゝれだ。ゐちゐぶよぞ。たひらふおり。
ゐまをはありさゐそうせきせまふ。給へくゐども給ひゝる。式部 そのことはゝぞ。
隣 緒 給ゐその残ハ。倫子 ゝ。へ。乳付 ちつげハ橘の三位 徳子 はめのとゝとり
ゝふ〻ひむつまゐ。ゝんよいゝとそ。大さゐゐんれおゐとつゝふはつ
る。備中 宗 むゐ。時 きの胡録れむすめ。ゝ〻人の弁乃めのと。ゐゆどのいせ
りのとゐ。ゝ。火とゐ。ゝをゐのゐも部。みとりのゐぬゐうへう。ゐゐき
たう。色 ゝきて。ゐゆゐる。そのを。桶 をけを。ゐるたいゐど。ゐゐゐ紀お
覆 ひ。ゝ。ゐ。ゝれう。ゐちゐ。近 光 ゐのゐふらひのをゐ。長 れるゐゐちふ。仲信
ゐそみものゐとにゐる。ゐ。御厨子 ゐ。ゐ。ゐ。清子 ゐの命婦。播磨 ゐりゐ。ゐりほゐて
うめつ。女房二人。大木工右馬 おほゐ。ゐ。ゐ。ゐ。ゐて。ゐゐと紀十六よあま

御むろへゆハ御はうーハとらのかーらハ諸本皆ハもドきー栄花によりて補ひつ
少将の君 小少将ゐるべしーハもド誤たるうまさ省きたるるやや

れむ(割)さる。うき(羅)ものこうち(縑)ぬ。かどりけを。うぐぬさいー(笄子)ゆーて。ちろきをとゆひーふ。うーらつきをえてをうーくゆんゆ。はゆどのハ。宰相の君。はむろへゆハ。大納言の君(源遍子湯巻)ゆまきすぐさどものきいるらんぐ。さ海(道公)こをうーげなり。若宮(若宮)ハ。厩いぐきをりはてはをうーハ。こ少将の君。(兎)ぐられうーらハ。頭(頭)ぐのかいーをりて。はさ紀よまゐる。このらぎぬハまつ(松)のみ乃ゆん。(裳)もハ。ういふ(海部)をおりて。お(大)海うをれすりめようぐどれり。こし(腰)ハうををのうう巻(編)をぬひふり。少将(摺目)の君ハ秋の草村てふとりなど(蝶鳥)ぐ志ろう(銀)ーてはくりうぐやうーふりぬのハかぐりありて。人のんよ(例)くべいやうゐけまバ。おーバうりをきいよきぐへるめり。歌のきんぐ(朝通)ちふ(教通)ぐどころ。源少将(雅通)をどうちま紀をゐげのくちり。わきたうう(通照寺)ちゐーきんとあーそひさ(護身)とくへんぢーのをうばぐーんよきふらひ(博士)ふ。かーらにゆめふをあーるべ(廣業)れだあふぎ紙さーげてわうき人りうーいまし」文よむをうせ。花人弁ひろ(廣業)ゆりかうらんのゆと

ふーちて。史記(五帝本記黄帝ノ所)をこよーちわーれりよりうれはゆどのこそもさゆだりうきまりてまゆるぐーこ紀おるーじはふこ乃をうせだりうやうハ(琴)りきん。伊勢(中原致時)むねと紀のをうせとうきいの孝経(古文孝経天子ノ章)なるべーし。又(大江挙周)ちうハ。史記文帝のまこ紀とぞよむゐるべーし」七日のかどうるぐーよろ河のゆのくくり(弦)ぐ。ゐ(鳴)きおまへり。人のやうぐいゐあひなどさへ。けち(掲)えん(馬)よあーいれるを見ーすふよきすこ志よかーども紙おゐーたるやうにこゐ。いとぐ物をーしさゐくてかくやうーきあーちすれだひるハをさーくゆー(式部)いでぐ。のどやうゆめて。紀んぐーのゐいのつぐゆより。まうのぐる(赤上)人ゐ紀見れぐいろゆるされーるハ。ありゆのーうーぐぬお(聴)ゐどうちさどもゐれバ。中こうるハーーてくくもゐんえぐ。ゆるさ(袖)れぬ人も。すこーおとゐびーまれハ。かーこゐーいこうるべきことハせぐ。ゐーえをゐーうぬ。三重五へのうちこに。うを紀ハありゆのむゆんのうら(表著)

ぎぬすくようにしてかさるよいあやうものとをくるくるもありあふ
ぎあどみるよいあどろくくくかくやうさでよくあらぬさまよ
ちくりんだくある本文うちうきあどしていひあそせしるやうなる
もんことをひくしうどをよいひのうどれなどまちのハをうくとえう
いくしうりんのんれおもひあくきぬけくれぞあくいふえなる。をうう
ぎぬのぬひものをぶさるとそそ袖くちよおきくちをくを。裳のぬひめ
うちをうるれいと絃ふせそくくれやうあくたく絃かざりてあやの
もんまうをあふぎどものさまあどはてをふうき山絃月のあう絃よ
見えてくるあくちくつきくくとそこそうとええさされどか
ぐみとうけくるやうなり」三日にあらせ絃よ歌ハ宮づうきの大夫より
むどめてはうぶやくあひはうまつる。右衛門のかみハあまへの事ぢ
んのうけどん。をうるうのはさらあどくハくいうび。源中納言。薄宰相
ハはぞはむつき。衣どこのをりくそ。いまかくびくつくあ冠ひ。をくさは

宮づうさの類本扶本のもとなし

藤宰相 用註ヨ行成卿と註したるハ非ニ行成卿ハ

下ニ侍従の中納言と見えたり此宰相ハ内大臣公季公の男参議兼左兵衛督実成卿ニ依て改めつ下皆ヨなし

御衣筥 御衣筥塗ニ銀泥、其上付ニ銀洲濱同鶴亀小松折立用ニ亀甲白織物下机花足面押ニ亀甲織物ニ以ニ銀泥塗ニ付貝小鳥鶯豆案二脚同以ニ銀泥塗ニ皆有ニ白銅金物四角付ニ白紐総同面敷ニ白大文薄物有下絵以ニ白糸綿小鳥等筥一合納ニ織物御衣一襲云々委くハ御産部類ニあり

およびのほとそ

くをなどおほどことあおほどをろきなれども。をぐ侍人のあくろご
ころ見えつ。をつくしうあうあうあたうはさを。大うこのそぐも
やつうまつらんひんぐれたいのふくのひくくい。上達部の産ホを
うくみて二行ろ。菊の紅きくに。殿上人の産ハ。みくを上ヨり。をろきあ
やのはびやう蛇どもをもやのくをにうくて。ぐ外ぐ侍ふ者てわくくさ
り」五日。萩ハとのくはう蛇屋くあひ。十五日ハ月くもり形くおもく
ろきに。池のくきはちうう。かくり火どもを末のをくこにとすくつ。ど
くきとをくうて。あやくきをの。主殿のをれちくづりありくくくく紀
どもまで。ふふくまふちがうちをくれるけて
ひくと。おくくくびひるれやうなるに。あくうくこれいをくくれ末のを
とおとに。うちむれてをる上達部乃すあをんなどやうのものども
さくへ。おのがをくかくをちふべうめることハ。うくる世中ハ光のいでおいく
まくくる事をうげよいつくくとあもひくをあるびがわようそ。

ことはこそあれの意を省きたる例なれバ句とすべしなりや

諸本なるやとあり古鈔本よりて改めつ

もとゐひでえーたり

類本並本ニハゑその二字やゑへにとあり今抜本釈本よりて改めつ

そぐろうちゐこおちよげなりやまして夜のうち氏人ハなふびこのりのうぢぞゑしもあらぬ五位どもなどもうこえうとゐくもゑーをうちうぐめてりちがひいそぐしげゐるさゐしてくさえあひがほかりれ御膳のまわるとて女房八人ひとつ物よさうそ紀てかこ理髪あげ志ろきもとゐひして志ろき志ゑん盤もてつぎまわるあくひの内まうゐひハ宮の内侍いとものくくくあさやうなるやうだいゑすとゐひでえーーうりうみのさがりハつよりもあらまほしきさ侍してあふぎにたづゆこうるうこうめなどハときよらに侍りしうゐうみあげうる女房ハ

源式部かくのうち京好がむすめ　小左衛門こびちうのうち道ときが娘　小弁大夫のうち

大輔伊勢のさいしゐすけちかぶ娘　大う侍左衛つ大夫うりのぶが娘　小う侍左衛つすけ道のぶが娘

小弁衛藤人ありちかぶむすめ　小木工もくのぜう平のぶすーといひとん人のむすめなり

うこうちなどをうーきわろ人のうぎりまてさーむうひつこゐうこ

りゐりーハ。いとこうるうひこそ侍ーうゑいハれゆのまゐうとそうみあぐうこと紙ぞゑうをどうこうをりとそさうりぬべき人こをえーせ侍へうーー紙ぞうーいみーとうれへな紀ゐどゆこーしきまでぞ又侍ーは帳のひんげーおゆそ二まゐうりゑ。世女房よ人ゐるこうりーー人くのけひこそ。又物なりーー。つぎのお御膳もものはうゑ米女めどもまゐる。戸ぐちのうこに侍ゆどのくへぐその内びやうぶようさうて又こゐるこむきにゐてく。白きうづーー雙ふうひよ侍ゐりすゑふくゐまこよ月のくゐゐきに。うゆめゐひこう。こぐーー主水理髪あげども。このこうりうん掃部ゐりの女官。うゐも志らぬをうりみうどつうさゐどやうのものうやあくん。おろそふ内うぞ紀けさうーーつく。おどろれうんげーーおゆやけくーーしきさ侍ーて。寝殿んでんのひんげーーれ廊。こうどのくちまでひきもなくおしこみてゐれバ人もえとをりかよまただれゆのまゐりきてく。女房こきれゆこよいぞゆこうりわうげ火影よこうくくと又えこうる中にこ大お

すゑまつ鶴をたてたる志ぎまめづくし
此十六字扶本ニハなし

難うち
源礼委記曰、元永二年五月廿日三夜云々、切燈臺於東上、置管四座一枚、

式部志きぶけおりとれ棠うゝぎぬ。小塩ハ山れこ松だゝをぬひゝるさゝ
いとをこゝ。おほきさぶは。陸奥ちのくれうゝのめ。妻とのくせんぐよたい
ふの令ぬハ。うゝうきぬをてもふれぐ。の紋ちろぐゝのでいしていとあさ
やうふ。おほうえにをりゝるこそ。掲馬ちえんなゝぬのゝうめやをれ
れ。弁の内侍のをふちろぐゝれをそ。鶴をゝてゝるちぎるめづくし。
ぬひものも松うえのようひをあゝそはせゝるゝんぐへかどくゝ。
少将のおもとのおれらまハれとうあるちろゝのをく紋ひとぐゝは
きちろふ。少将れれもとゝいふハ。志濃るめくゝうゝすけゝろがいもうと。殿
のゝぬる人なりうの紋の内前のありさゝのいとへよみせまりゝ
なれバ。夜居よゐのそうのさふらふ。内ぶびやうぶをゝあけて。おの世まハ
ゝうめでゝ紋とまぐ。えん話りぐゝといひ侍ゝ。のぐあふゝこく
と。をぞんをばおきて。多紋ゝすりてぞよろこび侍ゝ。うんどち
め座をゝちて。内をゝ。のうへまゝりめふ。殿をゝぐめまりて。撫ブ

大進清隆置筒簾於四座上次殿上侍臣両三人参進置紙(貞下龍置之)上達部同置之次有擲撥之興事六月二日五夜亦同云々、とあり
こゝつうひこゝ。の二字扶本ニハあし

うち扶ふ紙のゝ。そひいとまさゝ。欲どもはり。女房さろづきゝ。
あるをり。いうぐハいふべきゝ。どくちぐ思ひこゝろ乱。
式めづゝきひうゝ。そふさう月ハもちゝ。こそ千代をめくゝめ」
四條大納言公任にゝ。いぐんゝどう。紋バさる物ふて。こをつうひよういう
ひのべゝ。ゝど。私語ゝめ紋ゝ。そふ月どふとおゝくて。夜いくうふけぬ
きバまや。とうわきをもゝ。でまゝ。ふろくどもゝむゝちめまハ。女乃さ
うぞくゝふ。内ぞ。むつきやそひゝくん。殿上の四位ハ。あをせ一うさゝ。
六位ハ。をう浦一ぐぞうえゝ」。又の紋月いとおりゝろくゝ。ろうさくへを
うきう。わうき人ハ。ふまのりてあをぶ。色こなるをうよりもれ。ふ
ゝさ浦ゝさうぞ紋ゝるやうぐ。ぴかゝれ。ゝどくゝりゝ。ゝ。小大夫。
源式部。ゑ木の侍従。五をちの弁。右近。小ゑ房。小ゑりん。うま。やをちひ。いせ
人などゝ。ゝちくくゝゝる紋。左宰相中将経房。殿中将教通の君。いぐ。ふひいで扶
ひて。右宰相中将兼隆。ゝにさををゝ。せて。ふまのせ扶ふ。かくへハをぐ

とみ出しつ
鈴木朗云とハ行文カ
黒川翁云行文の説よろし
弘云こはあとなるべしあを省きさる例多
しもむふ本のまゝとすべし

かり
諸本なること有り
諸本ゆゑと有
いづれも叡本の説に従て改めつ

左近命婦云々
左近以下近江の命婦まで十四字朕本ハなし

七日夜ハ云々
七日以下十六字朕本ハなし

勧学院
勧学院者是淳

和天皇天長二年冬嗣大臣渉申立之七禅之内一人補別當是謂南曹辨云云

りとぐまりてさすがふうゝやまゝくやあゝんとみ出しつゝみさう。いと白き夜よ。月のひかりあひさるやうぞい。うちもをうしきやうなり。ゆのぢんにくる酒あまさゆりといふいう人どもあり。殿三位をえじめまて。侍従命婦。右少将命婦。うまの命婦。左近命婦。筑前の命婦。道公の命婦をどぞ少え侍しゝくふしゝくえしらぬ人ゝなれたびがともゆらんうゝ。あの人ゝもまどひ入ぬ。殿いでゐ給てあがすとゐきけしきふ。ゆてをやしたゝふれ給ふおくり物どもちかくゝよ給ふ。七日。秋ハおやけのたうぶやしあひ。花人。少将道雅をは使まて。をめくうぞくゝ月録うゝ紀ゝるふゝ。やあいぞこにいれてまゐれりやがて医しを給ふ。勧学院。氏ども。あゐゝしてまゐれる。けさん恭の袴どもも又けいを啓しを給ふ。ろゝ禄どもを給ふべし。おほひのぎしきいとに酒さりてたどろくゝしゝ。のゝしる。は帳式部のうちをのぞきまゐりてれば。かゝ園のあやとゆてさわがれ給ひ。うるハしきはけしきもええさせ給はぬ。こゝ

うちあやこおもや面瘦せて。れ給ふのこもれる。は有さ酒つゆよりもあへうふ。ゆ。ゝくうつくしげなり。ちひさ紀燈籠ろを。は帳のうちよりけされハくまもなきふ。いとぐしきはいろあひのそこひもちぐぐきよりなるに。こちゝ紀はくゝしハゆひそ酒さゝせ給ふ日ざかりきりとおゐふかけまくもいとはゝるれだ。え我をかきつを侍ゝぬ。れ行ゝされ事どもハ。一日のあゐゞ事。うんぢちめけろくハ。ゝを乃うちより。女さうぞく装束。玄の内ぞなどそへていぢ。殿上人頭ふゝりとはゞめてよりつゝとる。おゐ母やけのろくハ。お母うちき。ふを酒あゝざゝなどきいのれ行やけぞまなるべし。は乳付ちはをつうう。橘三位徳子のおくり物きいの女けさうぞくよおりめくゝ。細長をなどそへてちろがゐけ衣ぢこは。くゝなどもやゞてちゐきゐやゆ。又は給ゝこゝるあそへてなどそさゝ侍りし。くハしくハ見給らぬ。」八日人ゝいろくさうそきかへゝり。」九日夜ハ。春宮権大夫頼通つうふまつり給ふ。白きさゞづしひとよろひよ酒ありすゐさ

りぎしきいとさはとよいまめうし。白ゲのれは衣ぞこういぬをう
ちいでゝ。はうらいなどきいのとをれど。いはめうしうまうふをう
しきをゞうをもていまゝびつくもべきにもあらぬこそをろをれ。
こまひいおもてくちきうされ凡帳きいのさはまてくいこきうちも
のをうくまさうめづゝくゝあゝくゝなまめいてうあをれるあ
らぎぬどもにはやくとおしわてみえるれ。まさくのすゞと
もさやうりぞ見えをされる。こまれおとくいふくのをぢみはし
歌なり」十月十廿日まで内侍出させ給ふ。あれそをなるれま
しまよるもをるもはふらふ。道ゞのくゝ物中あもはうつきにもまあり給
つゝはめのとれふとをろをひきさゞさせ給ふ。うちとけてねるをさ
などハなふんもをくれぬゝまそれどろくもいとくほくくうあゝん
もとをきはをど猶見ゞんをやりてゞさゞげうつくしゝ給ふもおとを
りにめでゝ。あゝとをきハとりあをれををはひ

こまのおもと
こまハ一本ま
むまとあり又
一本まころま
とあれども皆
非之下まもこ
まといふ人と
見えなり

いとほゝく
並本まいいと
おあゝくとあ
り今扶本釈本
ま従て改めつ

もひ紀とまそをは凡帳のうゝろそあぶゝ焙せ給ふ。道公詞あをれあの家れは尿
とりぬゝハうれゝさまぎうをまあれはれるあぶるをそ思ふやう
なるまくちすれとよろこぞせ給ふ中つ。具平親王
よいれてそをゝのんよせある人とれをゝてゝをらはせ給ふも猶とふ
ふのうちハ品ひをるとあはをり」紀幸ちくなりぬとそをゝくうち
をいよゝつくりこゞくせ給ふ世にれすろき菊のねをゝゞねつ
つをりてまある。いろくうつろひをるもきをるゞんどころあるも
さ猶ゞくまうゝそたるをあさぎりれ見え猶ゝんをてゝ新
ハげにれいもをぞきぬべきまくちするゝあぞやまてをりふとの。
すこゝもをのめをる身をゝまゝうばすきゞくゝもそをゝ。
うやきそつゝあき世ゝもをゞくゝてまゝめでゝ紀とおりゝろきを
猶見きくにつけてもあゞおのひかけゝりゝんのひくゝうこのをつよ
くてのうくれもをだよゝゞうゝきをのまをるゝいとをるゝき。

なるを
諸本なるもと
あり先達ども
もかいをの誤
なるべしと云
へれば今改め
つ

いうでいまいまほ物とすれ志ゐん。思ひごひもなーぱ。ぱ。ぬうりゐ
どあ。ぱ。ぱ。てばうちゐぐめて。水鳥ごもれあのふとなげよ。ぱそびあく
る絃みる。

式　あゐをとぶのうへとやよそにこん我を深くうる世をすぐーつ」

かまもぱこそ。ぷをやりてあそぶとゐれど。ゐえいとくるーうんなり
とおもひよそへらる。小少将の君れ。ふこれこせしうる。ぱとかくる。時ゐの
さとかきくるーぜばつうひもいそぐ。又ゐれ々ーこそもうちさらざて
ゐんとて。おーとれうるとやうきかぜーさり。ゐん。くううたりにうる
よ。ぱちうへりいたうゐすめくるゐるこきんーよ。

小　ぱ。ゐ。ゐくなぐむるぱ。ぱ。ゐかきくるーしいふ志のぶるきぐれゐるらん」

かきうらんとも。れ。ぱ。ぱ。

式　ぱとわりれ志ぐれの空ハぱ。ぱ。ゐるあれどなぐむる袖ぞかりくよりも。れ。き」

その月あ。ぱ。ぱ。ーくつ。ぱ。ぱれ。ぱ。ゐるかひどもぱ。ーよ。ぱ。き。ぱて。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。

如一按ニ三句ニ雲まとあれバよりの方然るべし今叡本ニ従て改めつ

小少将　諸本ニ少将とありこは小を引に誤りたるなるべしとあ説叡本并ニ師説もあれバ改めつ

竜　ぱ。う。ぱ。ぱ。げ。さ。ーー。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ

あたれる諸本まあれたるとあるとは非之師説は栄花の文によりて本文の如く改められたれば今これを従ひつ

ひもくんたい　領巾は延喜縫殿寮式中宮春宮の篇云領巾四條料紗三尺六寸云々とあり

裙帶　紀山抄云女礼服其裙帶蜀錦半合如帳紐両端錦形不用蘇用紫是位驗也とあり

弁の内侍　元より以下十字校本ニハ色ゆめのやうなる云々

師云此所の十数字衍文なるべし

てゝ。それより一間へだてゝ。ひんぐーにあたれるきはゝ。ゆみなのみのけまにらす絃うけへだてゝ。女房のぬる。南のつゝらもとをりすぐれをはこ〜引あげて。内侍二人いづ。その日はうみあげうるふしきすぐさかゝ忍ををうしげふうきゝるやうちり。たゝ糸つの布いゝ（劍）とる。あをいろのむりんのうゝぎぬすそごれ。領巾裙帶浮線ひもくんたいをふせん（綾）きうをとゝ（蘭）しゞんよそあうりうそぎい。菊きくのあへうい移りはくれなゐ。重すゞつきのてゐ〜いさゝうをづまそこゐるかさをうめををやうふきまげなり。弁の内侍は。ちるゝの内をこ紅ふえびうめのおりもめゝうちきゝもかゝうぎぬはさきのよゐるゝとゝいとゝきゝやうにをうしげなる人れ侍ゝすゝ〜げふすこ〜つゝこゝるぞゝんくゝゝ〜うみえ（扇）る。あゝのきゝりをゝめてあゝを海〜ゝうとゝこゐ。ひきいあふちゞん。（袂）（淡）ゆめやうにもあるもひのゝ川わどよそほひむゝ〜あまくぞりきんをとあこのすゞくゝえかくやありゐんとまであゞゐ。近潮つるきいとつき

まや解〜ゞゝ試ゝ云いゞかくあるゞし。ゆめのやうよ。このよのもの。とゝもおぼえぬよそほひ」

つきゝきをゞゝて。御輿ゐ〜れあとゞもあこるふいときゝくし。改中務内そう〜などゝりて内侍よはゝふふ。ゝすの中紙又ゐるせむ。ゐ西るゝされゝる人ゝハ。きいのあ紙いろ。あゝい紙のかゝきぬよ地ぞりの裳。うハぎハ。おゝ見ゝて。ゐゝれ（蘇芳）わり物ゐり。あゞうまの中ゐぞえ（蒲）びぞめとゝて。ゐりゝ。うちめのどもハ。こ紀うゐ紀りみちをこ紀ま（菊）ぜゝるやうゝて。中なるゝきぬどゐるきいのくちゐゝれあきうすゝきゝ。とんいろゝ〜あ紙き菊を。ゐゝ〜ハ三へゐどんゝなり。あやゆゐゝれぬハ。きいのゐとゐゝ〜〜きハむゝりんのあ紙色。ゝ〜ハすゐうゐどみゐ五へあてゝうゝよどゐもハゝゐあゝやなり。おゐうゝれすりゐの。水の（摺裳）ゐゐをふやゝうりあゝゝくゝゐゝして。裳紐ノ下固文ゝ〜どゐもハゝゐゝめんをゞおゐ用くハ（裙）ゐゐるゝうちゐ紀ハ。きゝくれ三へ五へ。あて。ゐり物ハきゞゐゝう紀人ハ菊の五へのゝゝ衣をんゝにゐゝりゝうゝへハ白く。あ紙きゞうゝへをハすえう。一へハあ紙ゝゐゐりゝうへゝう。薄（蘇芳）ゝ川ぎゝくゝゐきゝすゝうゝ。中に

白きまぜたるもすべてをさ海をとうしきのこそかどくくしくく
ゆゑいひをゝどめづらしくれどろくしきあふぎどもうち
うけふるまひこそまはるぬうちもうちまどつゝえまうれ
けまどの弦はくしてつくろひけさうし。たゝゝどをそたる女
房のをうしきよいやをようあて。やさしの和どのれとるびいとをろ
紀けちめうみのをこしおとろへたるけしれまさうれこちた
きがわのまへだをうゝ又をるさていあふぎよりかみの髪ひ
つきぞあやしくくへのうるちをちるぐしくもくぐりてもゆてる
ををこころなめるかくる中ますぐれうとみゆるこそかぎりな
きるゝめうゝしてよりうへの女房高ようけてさふふ人はする
りつどひてさふふ姫あいし二人命婦ゑうに内まうるひの人ひとり
れものまゐををちくぜん左京のれりこのかをあげて内侍のいでい
るすゝれをしらりとりいづこまこはよろしき天女なりた京はあ

といろよやるぎのむゆんのうゝ衣ちくぜんハ菊れ五へのうゝ衣裳ハ
巡いめすり裳なりけまうるひ摺三位あれいろのうゝぞぬからあや
乃き形る菊のうちをぞうふきなある一ものとあけうりをしらくれ
まて海わあもみえど度ろう高いぶ紀なりをひてれまへよいでを
り給ふうへいぶきうつしをませ給ふどいをうるるせ給ふちこ高
いとをろ。弁宰相れ君内をうしとりてまゐり給へりゆやの中戸よ
り出しにとみうへれを給るうにぞわう高いおつしまをせ給ふ。
帝外うへをりいでさせ給てぞ。宰相の君ハこるをにうへりていとけそう顕證
にをしをるきんちしつるとぶふおもてうちあうみてゆ給へるうは
ち海うふをうしげなり。衣の易も人よりけふきをやし給へりくを
ゆくまくに。楽がくどもいとありしく給しし上達部あまへまさふふひゆ
ふ万ざいらく。太平楽。賀殿がてん。なづといふまひどもちやうけいしを海退
で音聲ふあそびて。山のさ紀のうちをまふ万どをほくなりゆくま

給つりたり
類本釈本古鈔本ハ給つりけりとあり

まことふるの高もはごみのあとも松風ぞまぶかく吹あらせていとたもしろしゐとよくたぶられたるやり水のおもちゆきふる景色して池の水なこしもさまぎそく海さもむきまうへのはあこめ。あぐふ
ゆきまり行へりたり。右京の命婦はおのがさむらめる海くふいとけしぐりさえさする。人こハ志のびてまゐぬちくぜんの命婦ハ。
古院のおもしまもしくときあのあの殿の行幸ハいとまびくありしと
なりそのをりかのをりなど思ひいでくいふ。ゆくしきまとも有ぬ
べうめれバまづふしてあとにあへもまびれ帳あげてくある
なめり。はるもいろなりたんあどぶいふ人あくばうちこぼしはべ
うめりはあれはあそびをしまりていとおりしろきにわろ高はこ
ゑうつくしうさまえはふ右のおとぐ方ざいらくはこゑまあひて
なんきこゆるとめてもやしきこえはふ海つのうこなど方ざハ
らくを秋楽とのろこゑまぎしてあるまぐのおほい殿あえまさ紀

ぎきの行幸をなどそめいぞくありと思ひはけんうりけることも作り
ける物をとゑ思ひ紀しはさうなることなれどはらぐうもおぐし
ゐることそいとめでたれ殿ハあるこたいでさせはふうへハいうせは
て右のおとぐ殿はあまめしそふでとりてのきのふ高川うさ殿の家司
のさうべきかぎり加階も所弁してあるいえ奏せさせはめりあこ
らしきこのはよろこびよ。うちれ上達部ひきつまて拝しまり紀
ふ爰京あぐうかどコうれしるハ列ゑもたちはハざり紀次ハ別あう
になりしる右海つ帥大宮の大夫ハ高ぐ殿けかくいしくる侍従宰おつ
ぎくくの人舞階も高のはうくよいくせはて移もなきふ殿いくうふ
けぬはこしまとのくもれでいでさせはぬ又のあしくる内のはつう
ひあさぎりうもれぬふまあれりうちやをこすぐしてみぐありよけ
りりふぐをぐめてそひきらせはあとをきこに行幸のはとそ又の日。
高ぐ家司別当おのとと人など職事さぐりりうりうもうでね

たきことおほう。そごろれたる河らい（空礼）をいなくびやうれ〳〵とあら
〳〵すりてはかのありさまいとはるまれ。そごろくすとまくるまま
りはるるはあとれ。うちあひてあけくそば（倫子）ばうへもまゐりはつ。まそ
うしげきはるこえはあひいとくんあとなりくれて月いとあかり
きふ。経頼きけ。女房にあひてこりるはるこびもげいせさせん
とまやあくん。つまどのまこりもはゆどのけをひふぬまに人のおとも
せぎりなれば。おのまこどのく東はつまなる家のふいーのつぎのまた
ちうりて。おくまやとあるいー。経房宰相ハ中れまよりそまぎさこぬ
むうしのかくもーあげて。だくすやるどあれどいでぬよ。大夫のおく
まやとのはまくへ。きくものだんもおとくーきやうれでばうな
きいーへなどいとれりふとまげなるはけーきとるなり。我はいく
へハせば。大夫とんとまゆそるーきこ（別）おとるるーるるーか
うれ。あよ上らうのはちめ。いたうもわくものとあるめはけおのたふ

けふのなふとさ
催馬楽の呂歌

ときるどはあをうーうーふ。ふくるまくよ月いとあかーかうー
のゆとろうさげとせめはへどいやくぐりてうむるめれはくん
を。ふといひちぐーかくくいくー。わのやうるる人こそめくはな
ちくぬやうにあさくくるもはこもるさるれなふうあきれぞはーと
思へばとるるまど」はいかハ。（五十日）雲月のはいくちの日きいの人くのまくそ
てのぶりつどひくるはかのいりさ面絵よかきくる物あくせの不まそ
いとようるそはーは帳の本のれはーれをハよくきちやうをおくの
こぐうーーよりひくうーのそくーらまでひまもあくせぞたてきりて南
おもてにたまへの物ハまるりするくうり。西よりてはは（皇太后宮詮子）宮乃れはのを
いのぢん（沈）のをーきるるくれのだいなりをんうーくるくのとふみ
ぞはまるるひ宰相の君さぬきとりつぐ。女房もさいー（笄子）めとるひるどし
くり。わう家れははのるひハ。大納言の君ぴんぐーによりてまるりする
くりちひさはるいはさくどもはくー（箸）れるいすくはるどもひくなあ

そびのぐとこゝ。（具）うれより東のまのひさゝーのこゝ。すこゝーあげて。弁の内侍。中つかさの命婦。小中将の君などさべいうぎうぞうつぎつゝまる。（式部）れくにおそくいゝうハ見侍ゝ。あよひ小輔（セウ）乃めのとゝ見ゆるさる。おぐゝきゝ侍うちゝたり。高いぐきまれりゝ帳れうちゝめて。とのの（子）うへいぐ紀うつゝまり給てゐぐりいぐさせ給へり。るかげ（火影）れゝさ侍。けいひとゝめぐゝ。あういろのゐゝれゝぞ。ぢずり（地摺）れゝ裳。うるハゝくさうそ紀給へるも。うゝぐけなくゝもあそれよこゝ。大宮ハえび（詮子）そめのゐへ乃ゝぞずいうの侍こうちきまれり。殿（道公）ゐちひハまゐり給ふ。うんぐちめれ座ハ。ゐいれひぐゝれ皆いのゐゝわめてなり。いゐふ（左大臣頼光内大臣公季）ゝ和れ大臣ハまゐりゝゐへり。そゝのうへうゐ侍ゐりて。まゝ高ひみぐれてのゝまり給ふ。をり（折）ひつ物（籠物）こゆのどもなど。座の内ゝよりまうちゐ君ぐちとりつぐきそまゐれる。かうらんよつぐけてを高ゝゝなり。炉（火）たちあうゝれ光のゐゐゝとゐをきれバ。四位少将などゝはよびよ侍て。をそ（脂）

ども。並本どもの二字ゐ一類本扶本釈本皆ある方よろし

燭くまゝせて人ゝいみる。うちのぐいぐんゐよりてまゐるべきよあすよりいは物いゝとそ。ごよひゝゐいそぎてとりまゝひつ。高の右夫ゝ侍のゝとふまゐりて。上達部（道公）おまへよめきんとけいし給。きこゝめゝつとあれど。殿よりまゐりてゐまゐり給。はゝれひんぐゝのつまどれまへまで。ゐ給へり。女房ゐゐへゝへづゝゐゐゝされゝり。ゝすども（巻上）御。そのまふあゝりてゐ給る人ゝ。ようつゝまきあげ給ふ。大納言れ君。宰相の君。こゆ物の君。高の内侍とゐ給へり。右の君（頼光）ところびゐきたちみぐれ給ふ。ぎぐすぎゝりとゝきゝ。ゐろふもゝゝぐあふぎぐとりたいふれとゐばゝゝとなきもゐゐう。大夫（斉信）うゝけとりてそゐるゝにいで給へり。ゐゐ山うゐひてゐあそびゝ。高ぐうゐれどいとおり給ゝ。そのつぎれまゐのひんぐゝのをゝらりとゐ。右大将（実資）りて。衣のつま神ぐちゐぐへ給へるれゝゝきゝ。ゝよりとなり。ゐひのまきれとあるづりきこえゝ。たきうとハなど思ひ侍てをうゐきこゝもいみよいをゝゝく

ざれいまめ〳〵しくよりをけるこそおいもべうめれ。ものさうづきれぞん
のくるる。大殿ハおぢ殿へどまいりのあとなるゝひのゐとせ万代ゆてもぎ
ぬ。左衛つ督あるゝこまのまゝりにゐむゝさ紀やさふらふとうか
ゞひ殿ふ。源氏よろくるべきひとみえ殿いねよ。うれうへハ海いていろ
でめ〳〵しくゝ海ゝんと閑ゐゝり。三位のをけうゝけこまゐどあるよ。
侍従の宰相実成ゝもて。内のたとぐれ公季あをもまバ。ものよりいでゝるをみて。
右大臣顕光たとぐゐひなきゝ殿ふ。権中納言斉信もみのまれをゝらゆとふよりて。
兵部のあもとひこゞろひをゝゐく紀たをゝふれゝゐゐ。殿のゝゐゝび。
わうろゝうゝべき衣の内ゐひゐめりとゐて。あとをつゐまゝふ。宰相
れ君よいひあをせて。かくれなんとするに。ひんぐゝおもてに。殿のき
んぐち。宰相中将兼隆などいりてさゐゞけまバ。ふてゝりこちやうのう
ゝろにゐゝくれゝゐるとゐりをゝゐせ殿て。ふゝうゐぐゝさゝへす紀
さを殿へり。和歌ひとゝばゝつゝうゝまゝつまゝさゝびゆゝさんとの殿をに。

いとゝいぢて。おそ殿ゝきれべきをゐ。
式　以かふいゝぐゐぞへやゐべきやちとせれあまりひさゝ紀君ゞみをバ」
あゝまつゝうゝまゝれゐゝうまゝと。二ゝびゞゝりずせきを殿て。いとをゝうの
殿ををゝる。
道公　あゝゞのゝゝひゝあれが君ゞゝ紀をとをのゝうずもかゞへとりてん」
さバ。ゝうゐひ殿へゐ内をゝちゝまもゐゞゝけゐまゐれバ。いと
あをれゝをゝりゐりゞけゝゝゝゝてをやゝゝさを見殿ゝをそハゝよゝろ
ゞゞのゝゝゞゝりも海をゝゝを殿ふめれ。道公頃定代もあへゐまゞゝく内ゐゝくす紀れゞゐ
ちぬゐゝちにゞゞふ。れもひつゞけゝらゐ。高の殿ゐまへをゝゝゝゝめをやつゝ
うゝまゝれりゝと我やめゝゝ殿て。高の中宮内侍父殿てゝゝゝまゝろゝゝろゝゝゞ海
ゝゞむすめゝて高ゝゝろゝゝれをゝゝゝまゝゞをゝゝゝゝまゝゞさいをひ殿り
と思てゝゝゝひ殿ふめりゝよいをゝとゝこハゝゝゝうゝゝとれゐひゝんめり
ゝとたハふれをゝこえ殿ゐもゐゝれをゝゝ内ゐひの海ゞゝれをりゝとゝゐ内。ゝる

とも申けれバ。さわがしきなかちかゝるぐゝめでゝくのゝこゝろをせ
給。（倫子）のゝうへさゝめくゝとわがをそまやゝとゝせ給ぬるゝゝれなれ
ど。おくりをゝとゝて。えゝうゝこゝ給いんねぞとゝていそぎたてゝ帳のうち殘
こほちせ給。（道公詞）ゝ為ゝ見しとおぼをゝらんだやのあれバこそ子をかしこけ
れとうちはぶやき給ふを。人ゝゝゝひきゝゝ。いゝせ給べきおとゝもち
ゝうなりぬれど。人ゝハうちつぎつゝんのどうゝらぬよ。わまへゝはは
ゝさうゝしゝくりいとゝゝませ給とゝて。あけゝてバまゝ。むゝひさふらひ
て。ゝゝこれゝゝ（紙撰調）えりゝゝのゝへて。ものがゝりれゝんどもそへ給ゝ。せゝろ
どゝろよゝゝゝこゝ紀くゝる。ゝつハとゝぶのつめゝゝゝゝむゝゝやくゝそあゝ
しゝくゝらゝゝゝゝのゝゝちゝつめゝゝ紀ようゝゝるゝゝゝゝ

弘云此辺ハ男女のなかの事まハ非す心あひの女友達などの上をいへるなるべしと釈ま云ハれたるハさもありぬべし

あまま　此の三字類本扶本まハるし

ふつゝけてうちかさらふ人ゝたゞ[女房之]ごんなるハあそれようきあそ〜ずこ
しけとほきたよりども紙さづねてもいひるをたゞこれとさ海ざ
まよあへ〜らひそぐろごとにつまゞぐをバなくさあつ。世よあるべ
き人ゝどとはおもそびなゞ〜さ〜なつゝうてたゞけうしいさ〜と品
ひたるかゝバうりのゞまを〜〜をさものこせるとれくたもひしる
身れうさうなんこふ物ゞ〜〜紙とうてみまどもさん〜やうにもおゞえ
ぶ。あさま〜〜くなるまなり〜〜人のかゝるひ〜なつゝも我をいこふ
おもなく心あさ紀ものとおひたとまらんとあ〜そうるにうれさへい
とまづう〜〜くてえおとづまやらぶんあくうんと思ひる人いあ不
そ〜まてハ文やち〜さらんなどうゞがるべゝめれバいゝでうい我
んれうちあるさ海ともぬうう[勘當]あ〜そうんとことりふていとあい
ありれど中〜あとなけまどおのづゝうあまゝうきゝ〜あるまえすこさ
ゞまらぶなりにゝうとも思ひやりつゝおとるひくる人ゝかゝうあ

かりける　並本類本ハかりけりとあれどきそハ諸格とゝのはす扶本釈本ハ本文とおなじ

どゝつゝずべてそろ紀きとふふまてもあゝぬ世よさゝるんちぞ。
あゝにてゝもうち海さり物あそまなりそるあゞえさゝぶうちか
さらひまとゝをあゝろとあてあもふこまやゝみ物をいひうふさ
ゝなくゝりてあのづゝうむつびうゝさらふ人ゞゝりすこゝあつゝゝく
おりふぞのそろあきや大納[女房之]ごの君のよるゝくゝハはまへあいとちう
うふゝ紀ひつ物ゞゝりゝ紀ゝけハひのまひゝきんなほよにあゝこ
ゞひぬるんこの。

式　うきねせゝ水のうへのここひゝくてかをものうえげよさへぞおとらぬ」

大　うちゝくふさもあきゝろれねざあよハはゞひゝをぞよハにあひゝき」
かをざ海あどさへいとをうゝきゝ紀ぶあもたをする人ゝるとみる。
古紀はらんゞてをうゝゝも海ゞでゝるゝ紀なんいゝゝくあくまを紀
ふと人ゝもの紀へり。このゝうへの[倫子]ぶ[消息]せうそこまハ。まろがせゞめゝ

あびなれぬあとけうといそぎまうでくまなくまゐらんとあり
しもそらとぶて程ふるあめありとの給はせ
はせられバあまふまにあてもさやうえさせ給
はせ〜まとなれぬうぐいけなくてまゐりぬいくせ給ふい十七日な
りいぬのこきあどきくつきどやうく物ふけぬみかうこ髪ひきつゝね
ふる人世よ人そのわうにもえうたうぐやのひんぐーあまて東のひ
さしにうちれ女房内裏ヲ御迎之も十よ人みなうの色さーのつまどへぐそこゝろ
ぬこーまえ宣旨乃せんぢのる。いとげの絲毛車とまの倫子ゆうへ少輔乃めめと。
わう高いぐ紀後朱雀もりその大納言宰相の君おぐひばくうにつぎのくる
ぬよこ少将。高れ内侍つぎふうまの中将とのりふるとろき人とのり
ふりと思ひうりーこそあなあとぐーーといとぐかるのりさぬむ
づうーうわもひ侍ーうそのりれ侍従の君。弁れ内侍次まあ東つのあ
いーこのくせんぢ。高きぶとまでは志次第ぐいーまてつぎくいきいめ
んこまそのりる月のくぬあきふいこーれまぎやとあもひつあー

こゝろ中将と云々

紫云こは式部が右馬の中将といふ老女とあひ乗りしたこと

ことゆゑびゆ

並本ハことゆくいひとあれども類本枝本叡本并ハ業花も本文の如くあり

をそ〜たりうまの中将の君をさ紀ふ〜てたれをゆくへもあ〜ぐたど
ふどーきさぬーそ我うーろをりをうくんをづすーくも思ひ志ゐるれば
そどの〜三のくちよ入てふ〜〜れバこ少将の君もれ〜てなほう〜
るありさぬ乃うきこと紀ゆ〜〜ひつ。きくこ〜る衣どもおーやりあ
つこえふるきろ〜て。ひとりよ火取決ぐうき入て。身もひえにるるもの〜
えーたるさ紀いふよ。侍従の宰相実成。左の宰相中将経房。えんのぶれ中将公信などぬ
ぎつぎよりさつ。こふらふもいと中こなり。あよひいなきものとれ
もされてやこ高ぞやとありふ紀人よとひきこ紀へるなるべし。いせあ
ーたよまあり侍らん。こよひハたへぐ〜身もきくみて侍りぞどあと
ゆーびつ。あゆこれぢんのうこよりいづ。おのぐ志〜いんぢといそく
もあよバうりれけと人ぞいと思ひおくらふ。ゆぐ身よよせてハ侍〜ぐ。
大うこの世乃ありさぬ。こ少将の君れいとあてにをうーげうて紀う
ーとゆーこそ和紀へるをえ侍るなりぢ〜志ゐりあとをーじまりて。

延幹
旧註ニ延幹俗姓曼陽成源氏大納言清蔭孫而号上総公僧也とあり

人のやどりハさいそひのあるくおくまで送へるなのりうしよ
べれはあくり物けさぞこ屏うよ内らんぎる。ぢくしのそこのうちれ
ぐどもいひそくしうえやらんうさもなし。てだこひとよろひ。くりり
うあはちろきちまし。ぢくりしるぢさうしぜも。古今後撰集拾
遺抄。そのぶどもハ五てうよつくうつて。志ぐうの中納言延幹とあの
おのさうしひとつよ。四くらんをあてつうせ送へり。へうしハら。
ひもおあじかくのくさうけごれうへよいれうり。志さまふしの
ぶ。めとまけやうのいあしへいまれうさよさどもれいへくの集
うきさうり。えんうんとちうすみの君とかさるハさるあめそこ
れハさぶけちうもそつうえせ送べきさんしらぬをのどもに志
ゐさせ送へる。いまめうしうさまことをり」。

五せちハ
此所よりハ下を下巻とそさるもあり

おほひ
諸本ニおひとあるハほもド落たるなるべし会補ひろ
ふたぐる
並本ニふさぐるとあれど類本釈本ニハ本文の如し是ニ従ひろ

五せちハ。廿日ゝまある。侍従宰相実成よまひ姫のちうぞくなどつうハせ。
右宰相兼隆中将のおせちにうづゝやされさるはろをしついでさうこ一よ
ろひニゝ見めのいれて心葉梅乃枝をしていとゝきこえうふハあ
にいとゝをむつるろうしうりをいとうえましるさこえあれバひん
ぐしれおまへのむうひなるたそ志とゝふひまもなく折わしつ
とりしる火乃ひうり。ゐるうりをえしたゐきをるうり。ゐのゝい
るさまどもあさましうつまきのひぎやとのゝれりへど。人の上とのみ
おほえぞたぐかう殿上人乃ひさおのてうはしむうひ。志そくさて
ぬぎうりぞうし。へいはんひきおほひやうとまれどあ見くこのう
しきさえ。おるじとそえるらんと思ひいづるもまがむのふぐる。
高階業遠
ありとほのあえんけうしばさ。あ一紀乃うくさぬやゝのようふるそのゝ
ふまぐれぜめづうしうゐ。さぬがちあゝじろさまぜでうをや
うあうむぞえゐる。殿上人あくろとふまてうづくこゐさようんも

みーろぎもせで　せでの二字釈本ハあし　もてかーづく　もての二字扶本ハたゝー　とヨおハーませバ　類本ハ北ヨ云々とあり

わゝこせ給てけらんど。殿も志のびてやりごとより外ごとおゝしーませバ。
んゝ海うせゝさゝびうるさゝ。ちうるさゝよれいゝうげどもひとゝーくゝとゝ
のひ。いとゝやびろふんゝく死けをひ。人ゝおとゝびとけぐめる。右
宰相中将乃あゝべきかぎりいゝるゝ。ひゝまゝーのふとりとゝ
のひゝるゝ海ぞゝとびゝりと人ほゝ色むなりゝ。そて不放宰相の
おもひゝーよ。いまゝうゝくんゝことなるうゝづゝ十人ありみひゝ
ゝ乃ゝすおろゝーてこゞ色いでゝる。きぬのけまども。ゝうゝ乃ヨ
れもへるゝ海どもよりハ。人ぞこゝ海ゝりてほろげヨ見えとゝゝ
る。ゝゝの月れあゝゝ殿上人まゝ。つゝのことなれど月ころゝとゝ
びまけゝうやゝろ人ゝゝれめづゝゝとゝへるけゝきゝりゝゝるハ
ゝれる衣も見えゞろゝ。其夜ゝう其ゝのゝけめゝてゝゝき物語
ふゝ月きやうなるゝこ一つゝ。たうう入ゝせ給へり。をゝりへハゝの
のうへゞつゝろゝけゝる。ゝ夜ハれ乃へ乃ゝみゝろゝ。うへゝわゝこせ給

実成

隆任

尾張守近光

御前

誤りゝ諸本同　ゞなれバ本のまゝとす

こゝとなれど　扶本類本ヨハ　ゞゝゝなれど　ゝくゝもゝあり

心ゝとゝゝる　諸本ゝりゝとあ　れど鈔本ヨよ　りて改めつ

うへヨ　弘云うへもの

てけらんゞ。わゝ系おゝーませバ。うちまゝ紀ーのゝーふつねよことな
るゝゝちゞ。物うけれバ志ゞーやゝゝゝひ。ありゝまゝりゝゝゝゞひて
まゝゝむとおもひてゝゝるにゝひやゝ色ゝ兵部ゝゞゝゝびゝりよ
ゝてゝいとせゞけれバゝゝのゝぐゝーゝう物もゝ見えゝ侍ゝゞゝゞゝいふゝど
ふ殿道公おゝーまーてゝゝゞてゝうゝてゝゝゞぐゝーてゝハゝるゝいゝゞゝゝろゝゝゝ
にゝとせゝーてゝゝゝ給てゝんゝゝ式部之ゝゝあゝゝゞまうのゝりゝゝるゝゝまひ姫ゝゞゝ
のいゝふゝくゝるゝーゝうんゝとゝ見ゝるに。をゝゝりのゝゝゝのゝゞ。ゝゝちゝあゝーゞり近光
ていゝゝる。夢のやゝうにゝゝゝゝる物ゝゝゝるゝゝゝとゝゝゝゝ

ふ。あ(赤)ゐ(井)なくびつゝいできてるハ。あいなくむつぶれていとほし
くこそあれ。さるハこゝわもそ。ふゝうんよもべきあゝるもゐ
の。我もこれもとさぞゝり人のおもひてさゝいでゝるあとなれ
どよやめうつゝ。たゞ(唐)ゝ(勝)ゝ清さりけさやうゐもゑえゝゝるぞいまあゝ
しき人のめふこそ。ゐとゐのゝけちめもゑとるべゝめれたぐゝゝを
うなきひゝゐゐ。あゝぶぎもゝゝゝぐゝゝゝすゝゝせびそゝゝゝれきん
ぐちれ立まゝりゝゝるふ。ゐてもありぬべき身ゐゐどんゐりちゐといい
ひゐぐゝゝ人はあゝとゝゝゝじとあゝゝそふこゝちもいゝうふあゝくをらんこあ
いなくゝゝゝいゝゝ死ぐゝゝくゝあゝゝきやゝゝゝ(丹波守藤遠)ものゝゝゝれゝゝゝゝの伺
(青像)死いゝ(白像)ゝつるぐゝれかぐゝ。をゝゝゝとゝひゝるに。(実成)宰相のゝゝゝ。
あゝいゝをゝきせて。ゝもつゝへのゝゝぐぬゝあ死ゐをゐゝゝゝくゝゝき
ゝるねゝげゐゝ。ゝゝゝのゝゝちも。ひゝゝいゝとまゐゐゝんえぐ。宰
相の中将(兼隆)ハ。わゝゝハいゝとそびやうに。髪どもをゝゝゝゝゐ死あゝめよ。

(濃)

ゝとゐげやる
秋本まハ心を
ゐげやるとあ
り類本まより
て改めつ

うゝぎハ心ゝなり。ゐぐゝゝハゐへなる中ふをゝりハ。ゐぐえびゐめ死
ゝをせゝゝり。中ゝゐゐゝゝゝゝゝあるゝゝゐゝして。物のいゐあひはやゐど
下仕のいとこのほをぐれゝる。あゝふぐゝとる。とて。六位のくゝゝ人どもよる
ふゐゝとゐげやるこそやゝゝゝをめゝゝ。女ゝハあゝゝぬゝゝとゝゐれと
れらをかれがやうまて。いでおゝとあゝゝば。又ゝてもゝゝ(吟)ゐよひ。ありく
びゝりまぞゝゝ。ゝゝまでゝゝちいでんとハおもひゝけきやハ。ゐまど
(目)ふゝえびあゝす死ものハ人れゝんなりけれど。いまゝりゐのおも家
ゝゝハゝゝでゐれまなれすぎひゝゝあすてゝよゐゝんもことやをゝゝう
ゝ。身れゝゝりゝゝまの夢れやうゝあもひつゝけられてあるすゝきこ
とにゝへ品ひゝゝりてゐゝゝくあ形ゐれがめとゐることもまひの家
ゝりけり。侍従(実成)宰相の五せちの法行ゝ。家のあまへのゝゝゝとてたが
あゐとなりたて志ゝゝのかみよりあとんにきくゝをゝぐれめをゝゝもゐ
人の物いふゝゐもゐれをゝゐ。ゐゝの女御のはゝゝゝよ。ゐ系。うまといゝ人

なんいとゐれてまゐとゝるこ。宰相(兼隆)中将。むゝしこゝりてゝうり給
ふ御。一枚うのかひつくろひあてゐるゝうし。ゑんぐゝりゝなんた系
と。源少将も足しりたりしを。物のよすゞ(便)ありてはゝへきゝゝる人こ。
をゝうゝもありけるゝるといひつゝ。いざゝらびゞかまいなゝじむ
かゝしんまくだちてゝ人ゐゝゝけんうちはゝうゝ給。うゝるさ海まてやハ
いでゝ列べき。きのぶとあのふらんをあゝハさんのんまて。あまへ(中宮ノ)まあ
ふぎどもあまゝさふゝふ中よ沼うらいつくりゝるゞゝをえりゝる
んゞくあるべゝ。ゝちりけんやハ。そこのふゝるひろげてひろげを(蘿)ま
ろめてゝらいゝるくゝども。ゝろきものいゝゝくつまくゝをゆひそ
へゝりゝきこゝさゞすぎ給ひよゝるわゝりまてくゝけそゞまよ
なん。ゐほくゝゝきと思ゝちの給へゞ。いまやうのさまあゝきまで。
つまもあをせたるそゝゝゝざ海ゝゝてくろかうをあゝまろゞゝそ
ふつゝゝふゝりさ紀きりて。ゝろきゝ一うきねよゝそぶゝるきゝり。

たいふのおもとゝてうきつけさたた。

式 あかうゝゝさの京人さゝゝ紀てゝるさ日新をあそれそこゝ」

中宮ノ おかやすへよハ。あるゞくハをうゝきさ海ゝりゝるゝゝてあふぎゐどもあ
まゝこゝそこの給をすれどもあどろくゝくゝうゝむもゝのさ海よあそざ
るべゝ。ゝゞさとつゝハたまてハ。ゝのびやうにけゝきゞゐせ給べきふ
も海ゝらゞ。ゝまハかゝるゝてくゝゞとにこそゝきこえさせてゐ給ゝ
るかるゝゞきつゞ○の人ゝて。こゝ(女房ノ)中納言の内侍ゝとのより左京の
君よまゝんとゝたうやあるさゝゝおゝるゝ引とゞめられたんゝそえぐる
ゝけれとあるふまをゝゝまゝゝうゝ。女のゝゝゝまていづこよりいまき
つるゝとふなりつるハ。女御どのゝゝとうゝゞひゐくおゐふなるべゝ。な
ふぞうゝれみゝとゞむることもあうつるひごろあれどゐせちすぎ
ぬとおゐふ。内ゝうのけをひうちつけふけうゝゝゝきをゝの日れ
ゝのでうゞくハげよをゝゝうゝけりゝうやゐなる殿上人などいう

御とのより左京の君よまゝんとゝたうやあるさゝゝおゝるゝ引とゞめられたんゝそえぐる

此ノ八字扶本ニハなし

類本ニハ御の上ニ女の字落たるゝ女御とのよりゝるべゝとあり此説さもあるべし

たゝの松の高松殿ハ明子の方ゝ西宮左大臣高明公の御女まて道長公の今一人の北の方ゝ

いまける並本ねまける とあり類本まて從ひて改めつ

よあごりつれゝ〳〵なんゝ。ゝう松のこまむ（小公達）ぢちさへこゝゝいゝせ給へ
ゝ。ゝりは。女房ゆゝゝされてまゝゝゝくゝとゝりあゝゝき給へゝいゝゝゝゝ
すげなりやさゝすゝぬる御ゝうにてゝかくゝゝる（隱）あせちこひ〳〵ゝゝど
えあゝにおもひゝゝらゝゝやすゝゝひこ（女房名ゝ）兵衛ゝどやゝのもゝ（裳）ゝそかゝゝみ
ゝまつゝれてゝこゝゝれやゝうゝさへゝゝりゝれあゝゝめる。（賀茂ゝ）除目のまつり
ゝれゝゝうひゝとのゝ（教通朝臣）椿中將の君ゝゝり。ゝの日（酉日）ハゝゝ物いゝゝゝれゝ。（宿）殿ゝと
のゝ（直）ゝせゝゝゝ給へゝりゝゝんゝゝゝめゝまひ人のゝんゝゝゝゝゝゝゝゝ夜一殿
ゝゝ殿ゝゝゝゝ。いゝとゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ

つゐまる
弘仁内裏式曰、中務省率侍従内舎人大舎人等各持掃弓葦矢陰陽寮陰陽師斎郎執祭具方相一人著假面黄金四目其衣朱白覆吉執戈左執楯假子廿人同著甲布衣朱袴頭巾入殿庭列立云々とあり

る人こけうちわらうは。狂いとけまひことありけりはとるていはいまはねるまゝの紙。けもいさどれくゐのもげさうあとぞめゝくいひあさるをきゝて。

式部くれてわが世ふけゆく風のおとにふのうちけすさすがに」

そぞひとりごゝれ。つごもり（三十日）は追儺つゐまるいとくゝそぬれば。歯黒ぐろめつけるどもそろはきけくろひどもすとてうちとけゐるに。弁の内侍ぞ。ものがゝりしてふゝ。はへりたくこれくゝ人はなげしけ志もふゐて。あてきぐめふものゝかきねひねりそ。（童女の名）などはゝりぐとちゐゝるに。おまゝのうゝふいゝしくのゝしるゐいゝおこせどやみゐもれきぞ。人のゐれさるぐゐおとゐのきまゐるにいとゐゝしく物も覚えぬぞ。ひうとれもへどさるよハあゝびゐくこれ君いぎゝくとされるおゝしゝてゝ。ともかうも言志もにれきゝまれぞまづまゐりてんまうんと。内侍（辯の）をあゝちゝふつきれどろゝうして。三人ふるふくあゝも

式部丞といふ　絵本まハりふの二字ゐゝ

かん日　旧註ゝ坎日自

そゝにてまゐりゝれぞたぐゝ狂るゝ人ぞゝうゐゝる。勅員こ兵部ゐりけりかくなりけりせゝるふいゝよくゝむくゐゐゝゝゐゝ。（御厨子）ゐの人もゝゝゐいで。言のさふゝひも言きぐちも言やゝひきそけるまくにゝなまゝでゝゝりて紙ゝてきのゝゝれど。いゝくゝ志る人も形ゝ。おゆのやどりれそゝ紙よびいでゝるに。殿上よ兵部丞といふくゝ人よべゝくゝと。（カ自）をぐも口すれてゝくちづゝゝひゝれぞ言づゝゐれどまゝでまゝりつゝ紙ゝとゝぎりゐゝ。式部丞ゝけゐりぞまゐりてゝゝろぐゝのさゝ言ぶちどもたぐひとりさゝいきゝられてありくゝ人ゝゆの受えびむゝひゐゝるもありうへよりはつゝひゐどゐりいゝゝゝうれそゝろゝゝそ言ゝゝをきめ殿よあゝるゐぐゝりいでゝさせそこの人ゝよ。（中宮）（裸ノ女房）のふ言いゝちれさゝうぞくハゝゝゝ言ゝ言ゝ言

節中計之正月辰日云々とあり

三へ五重
諸本三へ五へくとあり今新に従ひて改めつ

ふぐきもちひのことぐまりぬ。三日ぞ酒のやらせるふことくしの
はまのあひハ大納言の君ぢうぞくはいくちの日ハくまこあるえびぞ
めうろぎぬハあり女地ずりの裳」二日うだいの梅のありめかいねり
よこ紀寸長のこう衣いろぎりの立」三日ハかからあやのさくらぐさ
ねうろぎぬハまつうのおりもの。ういうハこき紅まるひハくま
あるハあうふ紅をまる日ハ。こ紀をまるのふなどまこいのことなりめえ
ぎすわう。山吹のあきうすきうだいうす薄紫あるどつゆのあくをひ
とこびまむつばうりとうを紀とぞ。いとさ酒よきほどふさふふ」さ
いしやうの君女房はまうしとりて。道公のくいぢきまらせ給へるに。つぐ
きてまうのぶうふまふくまこあるねの三へ五重みへあへとまぜつ。お
なじ条うちふる七へうひとへ残ぬひうきつくまぜつ。うへよ
あるどいろのくさ固文のあへうちきさ掛えびそめのうきめん浮文ひろこきの
ものをんをおりふうぬひざまさへかどくくし。三へがさねの裳。あの条

のうら衣ひとへのめんをありて。ちぎ酒もいとからめいろう。いとをの
しげよかこあどもつゆよりはくろひまてやうざいをてあしら
うくくしくをのしたけだちよ紀ねどふふくらあるる人のあねいと
こまあひ易ねひをのしげなり」大納言の君ハいとさこやのにちひさ
しといふべきうこなる人のちろうう髪つくしげよ丈ぶくとこえさ
るぐ。うをべハいとそびやあようこ。けよ三ぢんばうり何まりるす
そつきうんざーあどぞすべてみるのものをくあまきのにうつくしき
うろもいとらうくくしくのてあしなどらうたげふるよびあまう。
せんじの宣旨君ハはくやけ人のいと母そやうよそびへそめこれすぢこま
やあふきよらにそあひさぐりのさ長より。一尺ばうりあまりのへり。
いとんをづうしげよさハをなくあてなるはまー紙へり物ようさ
しーあゆこそいでれをしーるもこづらハしーうんづうひせらるこんち
さあてある人ハかうこそあらめとぞんぢ酒のうちの紙へるもあぼ白。」

青山堂蔵版

北野三位　並本ハ北のとあり叡本類本ヨリテ改めつ類の傍註ヨ輔正とあれば菅原輔正なるべし

この次ヨ人のこの方ちゆかかうきさこえさせバ。物いひさでのたくやゆるべきさでいまをやさしゆかうるる人のことハさでらしいうさぞやあどもこしもかゝるはいひ侍らじ」宰相の君ハ北野三位ハよふくらうふいとやうだいこまめかしうゆどくしゆ紀あるちしる人のうちゆかるよりをこめてゆくにこよるくうちまさりらうくしくてくちつきにたづのしけさもよりひやあることもそひうゆてゐしちなどいとゑゝしくたるかやうぞ又えゆへるんざ侍もいとめやをくんうつくしき物ゆらまいとをげうしきをそひうり」こゆ将の君ハうこえうとゐくあてよゆまめかしう二月バうりはをぐうり柳のさまをてうり。やうぐいはとうくしげふゆてゆかしゐまくゝん

なへるどもうぐんとハあもひとるかもなきやうにゆのづこをし。いとうをさぐらひあきうゐんぐゝしきまでこめゆのへりをらさるゐき人あしざ侍よゆてゆかしゆひつくる人あゝぐやゆてそれまお

うひくくく

きさげあり　並本ハあるとあり　類本釈ハありて改め

つこだいふハ　並本ハなどいふハとあるハ誤あり　類本釈本皆本文の如しかくあらざれハ文意通ぜざるなり

一尺ハ　並文ハハ一尺ハとあり　類本釈本ハありて改めつ

すくなのう　釈本ハすくなのうとあり　をのしげなりし人

諸本なし　ハて句とあたるハ中々ハひう

りるやうゞいの。いとをゝしげなる。ゆゑ侍るまゝ。ひさしひつきなど。まことふこさびなりうちゐこるあいぎやうもたほうり」ろうとの中にかゝちよりとたりるハこゞいふげん式部こだいふハさゝやうある人のやうゞいいまあうゝきさまゝてゝこうるつゝくすとハいとこちゝさくてゝけは一尺よあまりゝうけるをおちゐそうて侍りかゐもかどゝくゝしうあるをのしの人やとぞええて侍る。すゝちいなほすべきおるゝ」源氏部ハたけよきほどにそびやうなるゐどまてゝこのわあまやうふゝるまゝにいとをゝしくらうゝげあるけいひのめきよくこのいらうに人のむすめとあぶ侍るさまゝうこ兵衛丞などゝいときよげふ侍りそれらハ殿上人のこのめこたすくるありゝふれもとうちづゝてハかゝれなけまど人ぐまに紙もよういするふかくまてぞ侍るこの」

信従

あまのむくうこをいとこまのふををのしげなりし人いとちひきくはそくなほとうハまてあゝせまゐ紙ゝとあひつきやりして

ことゝ弘按るはこハ上のこそと受てをのしげありゝ人ゐれと云べきなれと省きそ人と結びたるゝ此例源氏よもあり

平中納言　類本ハ惟仲と傍註せり　弘云此所ののしづく以下十八字扶本なる

ことゝに云々　揚子曰膠柱調瑟云々と見えたり

やゝ侍まゝかゝれうちさゝすこゝあまりてきゐをいとたゝやかよそぎそまゐり侍ゝぞそれけゝびなりけるうゐをいとまのりきゝ」五節の弁といふ人侍り。平中納言云のむまめ申てゝ。ゝしづくとゆえゝの。給よろいゝる顔ゝてゐひいゝうゝれる人のまゝどいうゝひきくうゐも

時

こゝいとゝゐる不なくいとゝきろうゝまつきのいるつきいとをのしげ

髪

よ。かゝハゝゝゝゝめ侍ゝ素ハゝゝけよ一尺ばりなりてあぢゝくおほうりげなりゝしゝあさまゝしうわけるやうにおちてそそもさすのにゐそらゝぶあゝきハすこゝ侍まりて侍あり」まゝといふ人のゝこいとあゝぐく侍りゝむうゝそよ紀ゝこのうとゝいまハことゝぢにまのハさすやうまてゝそさとゐゝて侍れうういひくゝて。んゝせゝかゝうゝ侍るうゝそれもとうゝぐゝよいとゝゐろまもあゝ。ゝきゝぐきてをあしうんおもくゝこのどゐゐるゝよゝゝもうゝゝろやゝきゝゝるゝゝぐゝまることハかゝゝ。さゝあゝぐゝいゝゝまゝとうゝとゝゝゝべきと笑ゐゝるゝぞおほく侍る。さ

膠柱

もけしうらぶ侍ることゞもこの頃」。秋院(逝子)よ。中將の君といふ人侍る
なり。閑侍るたよりありて。人のをとゝふこのきかうしゝる文をぞ。そこ
に人とりて見せ侍りし。いとこそえんなれのみ世まいものゝゆゑ
しりふかのきたぐひはあらじ。きべてよの人はんもきもゝなるき
やうにゐひて侍べるめり。見侍しよりすゞろはあるやまもう。おほや
けばらとみよりあらぬ人のいふやうはにくゝこそゐひ侍へられし
このふゝかきまもあれ。うゝあるどのをのしからんはゝ宮院よりを
かふられの見しり侍ふ人のあらんよりふをすしき人のおひいでい。
見ず院こそたらんゞ侍るべなれなどぞ侍るげふあとうなれど。
わゞ方ざまれと絶さしもいそぐ。齋院よりいでさる歌のきぐれ
てよしとゐるもことよ侍らば。たゞいとをのしうようくしう
はあるすべのめる所やうなり。さふらふ人をとらべていどもんは
はもの見侍ふるわゝうり乃人り。このあうぎしもこれは海さらば絶。

心ゆるこのて
一本よゆるか
しくとあり

つよふいりゝうちてゐる人なし。どのしきゆふづくよ。ゆゑある有明。
花のゑより。郭公のこゑねおよまゐりこれば院(斉院)はいとはんのゆゑれ
ゝしてそのさほはいと世だるれうんさびしうり又まざるゝこともも
あり。うゝよ海うのがうせのふゆりは殿(道公)をんまゐり給ふのゐ
なるゐどのさわがしきまりもまゝらぜ。ゆてつけ。あのづのう
ちりこのむおとなりぬれば。えんあるゝとゞめ絶つくさん中よゐふ
のあうを紀いひをぐゝをうそ志侍らん。うゝいとうゆれ本絶を
りいまゝるんだせよそ。かの院(斉)よまゝらひ侍らばうゝよそ志らぬ
をとゝよいでありひをのいふとも。人のあうゐきゐ絶。いひおほをべ
きゐあらをなどんゐるゞのして。おのづゝゐまめ紀ゐらひ侍う
ゐんをやゝしてゝこのき人乃うゝちにつけそうゝけよそひよつ(齢)
ゝきゝとなるゝろ。おのゞおゝろりいをそけちうゞちゆの絶も
いそんとおのゝうちたらんはおよゐう人はおとうも侍るまゝゞされど

うちわらうして聞くれば人あらしまきしろひ給ふ。女御。后。まさいおとゝせ
ぞうの内のうこかの国そ屋とゝいひあらぶるはあるうもあくぶをこゝろ
女もいどまゝきことゝもなるもにうちとけ。あゝやうとして為めあし
きをばいとあそくゝしとおぼしめいれば。すこしよろしう。こゝら
んとゝ人いおほろけまていでゐる位らぞ。ゐやすくものもぢせぢぞ
あらんこゝらんの。名弱もをしまぬ人はすことゝるゐんだせのぶ
るもなくやゝ。あぐさやうゐ人ぬやを紀まゝにしちよりてうちゝさ
らへば。中宮の人うゐれうう。ゐしふよういをしゝあどもいひ位なる
べし。上らう中らうれほとぞ。あまりひきいりさうそめ紀てのゝ位
るめる。さのゝしして。家のはためめゝあざりにはあらぬぞんぐるし
とも見位り。これらをこのくえりて位るやうなれど。人はゝるとりぐ
みて。およあうおとり位さることゝも位らぢ。うれことゝけれぢものこと
おくれなどぞ位るめるゝし。されどとあうとぶおりうあら

僧都

本によりて改む

んとまめぢち位るめる世よりぐるゝうざれ位らむも。いとあさはな
らん。たぶ大うゝ紀。いとこのくおさけなのうぢもおるとん位りさ
れで家れはんあらぬ不をくらうくくくんまくくあゝしまくめ
紀。あまり物づゝせさせの人るはんよなふともいひいぞぢ。いひい
でゝくんもうしろやもくえぢるき人はせよかさはものとおぼし
あらひうぢげよ物のをりあど中ゝをゝとゝ志いぞゝるおくれさ
るふはあとうゝるるぢなりこのしとふふうさようはなき人のあよ
はけてわをはぶかなるこぶ。あまひぶのくくしさとも。物のをうよい
ひいぢしうるる紀。まぢいとゝをさるきれどるれゝしまてよ。
にあうこのゝはなりとゆしめしおぶしあこにれればたぶことと
あるとぶあくてもぐれをるぢめやをきことふおぶしるはけし
をふうちこめいる人のむをめどもはうるいとようかるひゆえ
させゝる程よろくくならひよるとぞんえて位るいまはやうく

雅

あとなびきさせ給まゝに世のあべさまなる。人のゝのよ紀もなべてさも。
すぎゝるもおくれゝるも。こゝろのほらんじ所りて。この家ゝうれこ
と紙。殿上人などもめゝれて。とふをこゝきこゝとゝ思ひい
ふべゝめりとゝなるゝろしめいゝうさうとそんゝくゝもなりえて
ぞとりそげ。せばいとあをつけいゝともいでくる物のらゝなるけゝく
ひきいれゝるゝろゝしてもあゝゝゝんとおゝゝの殆いきれどその家
らひなほりゝゝくゝ。ゝいまやうのきんぞちといふものゝゝるゝか
さ易て。あるゝぞうみゝ海めゝ人なゝり。新院などやうれ不ゝて月を
も見ん花をもめづるひさぶるゝのえんなることゝ。おのづゝのゝとあゝ
ひてもいふらん。あきゆふぐれ。ゝまゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝ

のこりてゆくすえのこのふぢらうれいぞあふと大納言（道綱）のいらびとはふれば。さるべき人こそさとにまうでつかひなるもいとまふさるをうくいたいめんする人あくて酒うで給ふ時も侍なりうの酒うれうんこちめ。高の位のうさにまうるれ物をもけいせさせ給ハ。おのくくんよせの人おのづからとりぐに酒のしりつく。その人おいをうハきまーげふ品ひて立いづる人うのことに高つくこの宮（中宮）の高さうれことうあれうあどいふべうめるもあとうりに侍る。秋院わうの人をこと。絶れとーめ品ふをうべーぢうをとう方乃えどころあり。酒かの人いめをえ志うーじ。をの酒かさうとぐめーとおもひあるづらんぐみとうあきすべてくとものどくうさハやをくわづ仏絶もちめんことはかさうべいとざ絶。さハ物もとでまげうをさのーに人をなきうあーよとそうる移よんのきハのこそえあらいるめをいとはらんぜさせまわーうう侍ーふをおきかる人のかく

しあをさうけう絶ぬをみてみそうにえをせてとううへーー侍ゆーうバ。れてううこそ」いづくもきぶといふ人こそれも志ろうあきあるしけれ。（和泉式部）されどいづくハけーあうぬかくこそあれうちとけてふををくーヒがきくうにうのうこのざえある人をのふいとをれるひもえ侍ありうくハいとををーきとものあばえうされことうとう侍ことの奇よみざ侍よこそ侍らざめれくちまろせるとでもホの高らびをうーき一ぬーのめよををうよくこそく侍りそれどホ人のようをら人奇なむじことうあくちんハいでやきまでこころハえーロよいとうこのよまうくあめりとぞうええ侍るすぢに侍るうーちづあしげれうくよみやとハ笑え侍らざ。（高階業遠）（江侍従）

中宮（道公）高。厩などのとうよハまさひら。（匡衡）歩門とぐいひ侍ることホやむごとあきハどうらねど。海ことホ高ろくくーく奇よみとそよろげのことにつけてよみちくさねどゆえうるかざりハそのれきとうホーの

ままひら衛門弘云父と母との名とこれうこの父ハ大江匡衡母ハ赤染衛門なれバこのままとに

けれ諸本けうとあれどさてハ語格違へう釈本の説によりて改めう

諸本まことゝルとあゝ今類本によりて改めつ

いみゝう待りけるゝ人
教本ハ鈴木朗ハ人の下ヨのルド脱のといけれなれど非ス
弘按るまこハ上のことゝ受ていみゝう待りけるゝなれと云べきなれと者きえ結びなるゝん上の宮木の侍従の條と同文法あり見合すべし
なるる待べし
此所誤り脱あ有るるべ按るる語勢ハなり待ぬべしと

ありたき所なれど第一ハてもゝ落ちてよて待べしとまやあらんス

なりまさる
並本まハなり

ことゝもそれこそそもづゝ〜しくちつ紀よ伝まこやゝもせばこ〜ゝふまぬバありとれゝりゝゝるゝ紀よゝいで。えもいえぬ。ゝ〜ばゝちとゝ〜ても。ゝ。ゝ〜こげよ思ひたる人ゝゝゝもいとほゝくもれぐえ伝るまぐまりり。」清少納云こゝそゝゝるゝりこのぐよいゝ〜ゝう伝りれる人ざハうりゝゝゝ〜ぐゝ。まゝゝ紀ちら〜て伝るゝどもよゝくこれぐまぐいとたゝぬことあ月ありかゝく人まとゝらんとゝもひこめる人ハゝゝゝらぐんゝとりゝ〜ゝりまゝうゝてのゝゝ伝れバえんまりぬる人ハいゝとすぐうまぐろなるゝりゝ。ゝのゝゝあれまゝすゝゝゝ。ゝゝ〜きゝとゝゝんまぐゝさぬ月どゝ。ゝのづゝゝゝるゝまゝゝくゝのぐゝるゝまゝゝゝなるふ伝べゝ。ゝのあぐふなりぬる人のゝゝゝ。ゝうハよゝく伝ゝん。ゝゝゝゝさぐゝにつけて。一ふ〜ゝのゝゝひいぐゝとるべきゝゝゝゝてまぐゝ〜伝ぬる人のゝこと。ふ月ゝゝのたのゝゝゝゝ紀ゝゝそなぐゝさめありふゝゝだふ伝らねど。ゝすぐうゝてゝゝ月ぐゝとゝぐゝにふひ伝らぐ。ゝのゝゝなほうせぬゝゝや。

ゝのゝもひまさる秋の夜もたゝ〜ふいでゝてゝゝのめバいとゝぐ月やいゝ〜ゝ紀めぐゝんとゝえゝるゝありゝまゝ紀。ゝゝ月ゝやうよ伝ゝぐし。世の人ハいゝむといひ伝るゝどがゝもゝあゝゝゝゝびゝゝゝり伝りゝんゝとゝぐゝあられてずゝ〜ゝゝくゝまひき入てゝゝゝゝ

ひとるとあり
類本釈本まよりて改めつ

おをすれど
釈本おはすれ
ばとあり

侍れば
類本侍れとと
あり

つかさよふこどもわざとおれのさゝ〇〇人も侍らびなりけゝ。
式部が夫宣孝ノコト
てふゝ人もおとよをゝ。そ里らとつ里ゝぐせめてあまりぬる時ひ
一巻　二巻
とりふゝろひきいでゝ見侍る紙。式部が仕女ノ女房あつまりておまへいあくれをす
れどけさいをひハすくをきなりなでう女らまんをぶこハよむむのし
ハきやうよむをぶふ人ハせいしきと。ありうごちいふ紙きゝ侍る
にも物いをる人のけを恥いのちをおるめるゝ〇どる。みえぬた
めゝなりといをまゝ〇く侍れバ。おもひくまをきやうなりまことを事
ふけもありよろづのと人ようてことゝぐなり。ほこりをふふきらき
らゝくんちよげりえをる人ハりよろづつ里ゝぐなる人の海ぎ
るゝと為紀まゝにふるき海んごひきぶゝ。おこをひぶちふくちひ
びらゝ。ずゝの為とたのきをゝど。いとんつきをくえをるわざなりと
為紀へてぶゝろにまのせつべきと紙きへわづけをのふ人のめふゝぐ
ゝりふをつゝむ。まゝて人の中にまじりをていをを海ゝき事ゆ侍る

のをゝと
類本釈本まハ
のぶの二字な
し

ろばゝくゝき
釈本まゝうを
うゝきと
ありと人のと
並本のもじを
ゝ類本釈本の
あるを従ひつ

どゝやとあもわえんうまゝき人まをいひてやくをあるべゝ。物のど益
きうちゝ。我ハとたゆへる人のまをへまていうるさけれどめいふこともも
ものうく侍ることりいとゝゝも物のをゝくゝえる人ハゝゝ。ゑぶ
わぶんのたをつるすぢをとらへて人をバなを紀よをきをなりそれんよ
り外のをゞおのゆのげををづとゝ見れどえさらびさゝ〇むのひまゞりゐ
ふることゞをよりをゝうぐゝさへのりどのれをゝ〇とをゞのゝきふハ
あゝねどむづゝ〇とものひをゞ。おけられる人ハいとゞなりををゝ侍
きをだかうハゝ〇をゝらゞりきゝいとをえんをちげうゝくゝ人をゝ見えをく
げをゝろばゝくゝきをゝ〇て物ゞをうこのをよゝめ紀ゞうちに人と人
ともおもをゞねゞげをゝ見ををゝきをゝ〇人ハいひおのひつ
ふくをゝゝとゝみるふハあやゝゝきをまでおいゝこのをゝきと人をとをんお
ぶのるとゞをゝをいひ侍るををゞづゝ〇ゝくをゝをうおいをけ物とをんれと
されふけるをゝ思ひ侍をゞたゞこれゞわのんとをらひのをゝ〇侍る

のどやか　扶本やもとなし

ありさま。中宮のおまへもいとうちとけていはえじとなむおもひしる
ど。人よりけふむつましうなりにることゝの話ども。側目をりく侍り。
くせぐ〳〵しくやさ〳〵じもぞられまる人なるもそバめぐそられて侍
らまし。さまようもぐてく人いおいらこのふすこ〳〵ゐおきてのどやかよ
れちるぬぬる況めとこしてこそ。四方もよしもをの〳〵うしろやを
られず。ふ多めの〳〵くあぐく〳〵れど。女性の人おらく せるくか
さきらめため見えまく紀さまぜずざなりぬまバにくうい侍るまず。
我ハとくすく〳〵ちもちげ。持しきもとぐ〳〵くなりぬる人ハさちち
ねよつけてされよういせらるゝほどふ。ろの人まハめとぐまるめをし
とぐめつれだ。かならぬもめ況いふもとぐれ中まもきてめるふるまひ。来居行跡
立
さちていくうしろでいも。あるらびくせいえつけらるゝとぐふ侍り。物
いひすこ〳〵ちもをぐなりぬる人と。人のうへうちれとこ〳〵めつる
人とふ。まこそみゝもめもたてらるゝ わざまこそ侍べられ。人のくせる

きかぎりハいうでえあるきこゝとの業をもきこえじとつゝこなげれ
なきけつくらまわ〳〵う侍り。人すゝみそまくいとおいでつるえ。ろろ
きこと況あやまちゝこんもいひろらりんまもぐこりろうあびえ侍り。
いとゝよのらん人ハ。我をまくむとも。されいなほ人をあめひうしろむ
べけれど。いとさ〳〵もえあらびおひ。慈悲ふあうれをする佛ざふ。三ぢうをそ
〳〵るつゝハあきこ〳〵とやハとき況ふなきまいてあぐのりまにごりふこの
き世の人ハ。れつらきく人ハ況らのうぬぐ〳〵しそれをとれまきりていえん
といみ〳〵きこゝとの業をいひつけ。むあひあそけ〳〵紀あ〳〵う侍りうふ
まこゝもさハあらぐをめておくく〳〵。うえぐハあゝさらのなるこゝとのけちめぞ。
ふれ況どいはえ侍るこの〳〵」。左衛門さあるものあい〳〵といふ人侍り。あや〳〵う
まぐろにはこのらびおあひ々るもえ〳〵う侍らぬふうきこりうおとれ
おほうきこえ侍〳〵うちのうえ。一條帝乃源氏のものがうり人ハよませ況つ
つゞ〳〵めり〳〵ふ。式部この人ハ日本紀をこそよみ況べれ侍ことよざ

るれきこりて類本るれの二字なし

あとぐの中にあり　弘云以下四五句諸本句読の誤あり今悉く改めつ

史記といふ
此五字類本扶
本ニハなし

えあるべしとの給はせけるに、ふとおしなをりにいみじうゆゑ
づけるとぞ。殿上人などよいひちらして、日本紀の御つぼ〳〵とぞつけら
ける。いとをかしくぞ侍る。あのふるゐたちの女はまへにてぞよつこと
侍るめる。さる所にてさえぬ所にいでゐ侍らんよこの式部丞といふ人
ぞ。ものうはべて史記といふ。ふとよみ侍りしと。紀さへ。ひつ。かの人
はおそうなることとり。わすれて所をもあやしきまでぞ侍りし。侍りし
ばふ〳〵にん入るる式部が父為時おやはくちをしうをのこにてあらぬこそさ
いはひなりけれとぞつねよりあげみれ。侍りしに。をとこだにさ
えぐりぬる人はいかなるふぞやとぞ。やうやうぞ侍るめるとぞやう
う人のいふもゆゑとあてのちいちといふのしるしとぞ。侍りし。
いとてつよあさましく侍りよみしふ。ふるどいひけん物もふもとぞ
めぐなりて侍りしよりはよく〳〵かくる事ぞ侍りしのだいろ〳〵人もつく
さてふくむらんとぞ。

おほい
諸本おほひと
あるハ誤ル今
類本扶本まよ
りて改めつ
をしへさて
並本まハをし
へたえ云々と
あれど誤ル類
本叡本鈔本皆
本文の如し

と侍ざふよまぬあかをし侍りしを。中宮のおまへにて文集のかしこよりのせ
給はるどしてさるはまものとおろしめさせまゐらしげふおぼいしりし
ばいとものびて人のさふらはいぬものゝひまくれにおとろしの夏
ごろより楽譜といふ〳〵二くさ寛弘四年ことえさせてそべるもかくし侍り隠
ものもものびさせ給しとて。道小帝之御をうち中宮
もけしきをおろせ給てはふ〳〵どもをめでさうのせ給ひてぞ殿ハ
まらせ給ふ。ことにかうよませ給るどすることそのものいひ
の内侍左衛門はえさうざるべしおりふそしり侍らん物とぞ謗
て世中とわざおげくうに紀のものに侍りけりいろふ今ハおといとし侍
らじ人といふともかくいふともふぶあさぶ佛よりあるこをうくさやう
をあらひ侍らん世のいとうきことふすべてつゆばかりんもこまら
びなりおて侍れば聖ひ〳〵しりよあるらんふけ怠ざいもそべうも侍らぞたぶひ
さこちよそむきてもおそまのぼらぬかどのあるたうべきやうなんも猫豫

めづらしうぞ
めづらしのうぞの意なら並本ならそをとそさちさるハ誤なる類本ならもこそとあり

べるなるゝれよやをゝひ侍るゝり。さしもいたよき酒どよりうとて
まこのるいとうもれよりおいぶをてそうめづらしうぞうよるをん。
もいとぶた酒さまさう侍らん物をゝふのき人まねのやうよもべれど。
いまいゝぐかくるうこのことそおのひ侍ふるそれつゝふのき人ハ
まこうるゝらびしもこのるひ侍らじゝ紀の世ゝるゝ世ゝあとのゝおか
く侍れバよろぶをつけてぞるゝう侍るゝふゝるえのきつゝけ侍
らぬ事をよゝさもあしゝさも世ゝよるゝをゝ身のうへのうれへまそゝもの
ゝらぶを聞えさせおる酒ほしう侍ぞうしゝけしゝるゝぬ人とゝひき
こえさすとそもかゝるべきことやハ侍るゝはまどつまゝぐゝまおゝし
まれらんまゝつまゝぐゝのん侍らんぜよゝ又あぶさん世ゝとのいとゝう
益
やくゝるしゝどれほゝらぶとゝもかゝせ侍へゝ侍へん。四めあゝもちり侍
らバゝいといゝしゝあらんまゝうしゝくゝもあほしくぞ侍るゝのごろほんごも侍
やりやきうしゝふひゝをゝなどのあつくりにこの書ゝ侍りふしの

ことさらよ
並本ならハことさらによることよもじあり今類本釈本ならに従ひて削りつ

ちらいさう
或僧正師式宝箧印陀羅尼経曰況有衆人或作塔形或罪障悉滅所求如意云々と旧註ならあり
こちあひ云々
此の十字解きかたしと旧註ならあり誤字あるるもや

ちゝのふゝも侍らぶのゝにまざとかゝしとおもひ侍るぞいとやつき
しるることわろきゝるゝまハ侍らぶおとさらにはらんじてハとう侍ハら
んえよゝ侍らぬ不ゝすゝれとゝしぞ侍らんそれハあるまハはらんじも
ゝさせ侍へあしゝかゝ世の人とのうへ紀ひしくゝそにちめ侍れ
バゝ身をたのひすてぬんのさもふうう侍るべきあゝ何せんとふの侍ら
ん」十一月ハあつきゝぶうへるらせ侍ふゝ車ならいとのこうへ人ゝ
ハ舟にのりてさしわうりけりそれりえおくれてようさうまゝる教
化おおあふとゝろ山寺のさほうううつしゝて大さんげ悔懺ゝもちいさうゝるど
ひてすゝこしぶゝまりゝ侍へるほ夜れはだうしゝげう教化ども説相ゝるん
ん世人ゝあゝゝ。中宮のゝくゝてあゝしゝますゝゝ紀ゝちのひさうしゝふゝは。
ゝえてゝゝゝうゝゝことゝもあゝまゝゝあゝりおとゝそゝ。殿上人ゝ殿ゝのりて。
ゝゝゝこぶつゝきそゝなそぶゝだうのひんゝしゝけつまゝおむきふおしあげ

今様 たまへの池なるうきこゝろ心とりふるやこゝろ
いふ歌なり

大夫云々 白氏文集巻三 曰海浸々徐福文成多誑誕上元太一虚祈禱とあるを少し替へて誦しなひしなるべし

うめのえだ

るゝとゝまへいけ(池)ふねくりたろしるをしけうらん(搗)ゆきうへて。
(斉信)の大夫はゐ給へり。(道公)殿のあらさまはあらせのゝへる程ど。宰相の君なども
物ぞうしてたまへる。内外もさもをのしき
程どなり。月あかうにさしいでゝわあやうなる君達。今様いまやうなるうたうたふ
ふもふねよのりおほせらるゝ。藤原正光大くらのかう
ふるくまじりてさすがのよしもうちそへんもつゝましきよやものび
やかのまてゆるうしろでをしうえ四まびみをのうちに人もこ
そのふさらふ。舟のうちまやれいをばおこつらむといひてるをきくつ
けられへるまや。大夫徐福文成誑誕なほしとうちぶしられ給もさま
もさよあるいまめかしくゝ西池のうゑ系とうこひてぬえなどふき
あませらる。あのつきぶくこれ風のけをひさへぶ心とあるをなりとも
もおぼゆるとこのら生りなり。源氏の物語にまへ人よある歌。道公のゝはら
んじてをいのをぶろぶとをいでゝ。うめのえだよりあ

秋本よりうめのちさとあり

れるこのこゝまかゝせのゝへる。
(道)
世紀のものとあるたれば人のをらですぐるはいらじとぞおもふ」。
たまはせられで。
(式)
人よまぶをうれぬのゝ袖たれうこのすきものぞとふくちなしけん」。
めぎはーうとさこゝもとこ殿よねるる袖をくく人ありとときけど。
おそろしさよあとゝもせでゝのしるつとめて。
(道)
よもすがらくひなりけよなくりくぞまゝ袖のとぐちよたてきこびつ」。
かゝし
(式)
たぶるもじとぶうりたくくひあをあけていふふくやしのらゝ」。
(寛弘七年)
ちとしー正月三日まで。ふくちれはいくぞきもちひよ日こふまうのぶら
せ給ふはとゝもに。ふる上らうもまゐる。左衛通のつのこゝ。いぶきをり給て。
(道公)殿もちひいとりつぎて。(帝)うへのいぶぞのせこそまつらせ給ふ。(載)てふくへのいぶぞのせこそまつらせ給ぶ。

えみひやうど　傳本くゝふこゝやうふとあり今類本抄本によりて改む

えもものたり。大宮（皇太后宮・東三条院）ハのゝらせ給ふそぢ。とゝしの春いとゝまさのあひ宰相の君。をいのこの〳〵ゑあひ。あどよりいとをう〜。藤（女房）ゝ。さくみ。ひやうご。ほそのうまろ。かゝあげ〜るあ〜ちあどこそ。ぬまのあひいとことふみえ給へ。ろうあ〜やくまろ。乃女官まて。ふやのをうせさう〜ぞちさいらぎあたり。たうやくくだれる。きこのとぐもなり」三日。夜の大宴ハとありて。臨時客。ひんぞ〜むあてこうそ〜ひて。例乃ともうかんざちめハ。傳大納言（道綱・実資）。右大将（中宮大夫・斉信）。四條大納言（公任）。權中納言（隆家）。侍從の中納言（行成）。左衛門督（有國・額通）。ありくふの宰相（大藏卿・正光）。左兵衛督（実成）。げん宰相（額定）。むあひ〜〜ゐ〜まへり。源中納言（俊賢・注前）。左宰相中將（経房・後一條）。右宰相中將（実兼・隆家）ハ。あげ〜の。ちをふ。殿上人の。殿乃上につき給へり。ものゐいぐきこえ給ふ。帝（後一條ガ）つく〜〜にきこえ給ふ。うへ（詞）。よい（後朱雀）とゐいぐ紀きらんと。殿の給ふ。いとねんきことふ〜給てあ〜とさいあむをうつく〜ぐりきこえ給てゆ給へむ。右大将ゐどけうぐきこえ給ふ。うへ。まゐり給てう。殿上よいでさ

せ給てはあそびはのりきり。殿ものいのゐハせ給へり。どづらハ〜〜とあもひてがくろへゐるよ。など（道公詞）はてこれはまへのはあそびよめ〜つるふさふらハていうぎ法のでにゐるひぎをうゐどむつあ〜せ〜まへるさるハうを一つつのうまろ。ものやのあひりまハつゐの日なりよめ〜くとせめさせのふうちいぞんよいとこのこはあらむ。こよゐうらぬはゐ。ひゐめれバいとぐはいろあひきまげよ。ゆあげをゐやゐふあ〜ちゆ〜〜くて。ぞ〜ごろ。ゐれすきまぐげまそ。ひとゐ。ころゐそ〜まををはうさう〜〜くゐをりまり〜ふかくむづう〜きまでひぐりみぎにゐをるゐそうれ〜〜れとあ。ゐとあこまりくゐ。ゐぐちゐ。ひきあげつ〜ゐまりゐ。ゐ。ゐべよ小松乃をりせバとうちぞ〜ゐあ〜〜しあらんとよりををりふ〜れ人のありき法めでゐ〜くあ。ゐえさせゐ」ゐの日夕つあさいつ〜〜ゐとかすゐ〜ゐる宣を法くりつぐけ〜ゐる軒のひまゐさまてだゐ〜ゐ。殿のうへ。ゐ。ゐ。ゐど。ゐ。ゐあのあ。ゐ。ゐ。ゐ

子日ノ歌
くちすさミとめでさこゆこの命ぬ[後朱雀]そのゝんえてかどくゝしくハ佐
る人なれ河のおらさまよまあでゝ二の[五十日]ゑのはいあを正月十五日その暁ま
ねるよこ少将の君あげれてゝたなくありゝるまあり給へりれ
いのおゝゝ下よねゝうゝふゝうのつゞゝをひとつまあをせてゝゝみ
まさゝなる涙とも出むひとゝびまありてハ几帳ぞうをへゝぞそふ
てあり[道公]殿ぞゝゝらせ給ゝゝみよゝゝぬ人もゝゝらゝるゝゝゝどゝゝに
くゝされどたれもさるゝとゝくゝしきゝとゝあけれどんやをくてなん
日ゝけてまうの河ゝ物の君ハさくらのありゝめゝゝうゝ紅梅あゝゝのゝ
らぎぬをいけ[摺]をり裳き給へり紅梅ゝまえぎ柳のかゝぎぬをのまう
めゝどいまめゝしけれバとりもゝのへ河べくゝぞゝゝゝやゝなるゝうへ人[後朱雀]
ども十七人ぞ袁の内のゝゝにまゝりゝるいとゝゝれハまゝのゝひハ橘三[徳]
[子位]とうつゞくゝゝゝにいこ大夫式部ゝうちまハこ少将内ぞどきさいゝうち[御]
[帳]やうの中ゝ二ところゝゝぞゝゝあゝゝしまれあさ日の光あひてまゝぞゝゝき

行ゐほし
御なほしハ御引直衣なり小口ハ紅の小口の袴なり

さめたるなり
類本歌本ハ

帝
までをづゝしげなるゝはまへなりゝうへハゝはなほし[小口]こくちをり[中宮]袁ハまき
いのくれゝゝゝゝゝゝゝゝぞこゝうぞいゝゝゝえぞぎ柳山吹のゝはゝゝゝうへゝまハえびそめ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

さだめたるこゝろりとあり

りこ大夫ハくれなゐ一のさねうへはこうぢいのこまきうちき（五重之）いつくを
かさねしうりあらぎぬさくら添式部ハこ紀よみこうぢいのあやぞさて
侍るあり〳〵ぬりのあらぬとろしとまやそれあかごちもとけ
さうなるゝ〳〵そとりあやまちのかの又えさらんうだあをも
えらせ給へけれさぬのかとりまさりいふべきとゝ〳〵ぞもちひまる
らせ給ふとゞもそて〳〵ぱ〳〵いあどまうで〳〵ひさしれこまあぐるさふ
ようへの女房ハ帳のあ〳〵れもてのひのあま〳〵ふあ〳〵かさねるや
うそあゝぬる。三位をそゝめて。内侍のもけゞちもあまこゞまあれ
山ゐのへくいはこのうどハあげ〳〵のし〳〵も東のひさ〳〵の南のさうじ。
をあちてゝきかけ〳〵るに上らうハあゝうみ帳れひんぎ〳〵のをぎはさ
ゞすこ〳〵あるふ大納言ハ君こ少ねのあるを給へるあよさゞよ田紀てえ
るうへハひらきの侍ハ座にハ脇まねりすあ〳〵うたまへの物〳〵る
さあいひつくきんうこを〳〵すのこにふむこたにす〳〵紀あゝをてかん

中宮大夫
此の四字並本
ふいふし類本
ふいあり
をよろしとう

経孝朝臣
此の四字並本
まハなし類本
叙本まハあ
ある方よろし

あゞあり
此の五もじ並
本まハなし類
本叙本まハ皆
ありある方よ
ろし

ゞちめ。道公顕光公　公季公
右うちのおほいとの。懐平　大夫中宮大夫。斉信　四條大納言。公任　それよ
り忘もハ。ええはべらざり紀ハあそびあり。殿上人ハ。ものたいのうへ
ふあ〳〵うるらうにさふらふ。廊　地下ハ。さゞまれり。あけまきのあそん。こ
もうぜのあそん。ゆきさう〳〵ぞもまさ。ゐどやうの人〳〵。上　うへ四條大納言。公任
こゝ。拍子　とう。琵琶　弁ひこ。通方　こハ。経孝朝臣。左の宰相中将。経房　笙　のふえ
とゞそ。双調　そうでうのこゑまそて。あなた。安名尊　ふとつぎふ。席　むしろた。田　このとの。此殿　なゞど
うゝふゞくの物ハとりのをさうをあそぶとのざにもてうゝ〳〵るゞを
ふく。笙　にをうゝ〳〵うちゝゞへてとゞめらる。伊勢　いせの海まゞありゝ。右
のれをゞ。顕光　とゞん。和琴　いとれ。ゝ〳〵ろ〳〵なゞゆをやゝ給ひゞれ給ふめり
ゝをそにいいみゝ〳〵きあやまちれいとほゝ〳〵きこゝそ。こる人の身さ
へひえ侍ゝ〳〵ぱあくりものふえ二箱りいまてとゞそええ侍し。」

校正
首書　紫式部日記終

紫式部略系

- ○良門　閑院左大臣冬嗣第六子内舎人　正六位上贈太政大臣正位
  - 利基　従四位上右中将
    - 兼輔　従三位号堤中納言歌人
  - 雅正　従五位下刑部少輔
    - 為頼　従四位下大皇太后宮亮　歌人母右大臣定方女
      - 伊祐　従四位下讃岐守
        - 頼成　従四位下因幡守　實貞親王子
    - 為時　正四位下越後守或云越前守　儒者歌人
- 惟規　従五位下式部丞　母常陸介為信女
- 惟通　従五位下安芸守
- 定暹　阿闍梨
- 女子　尊紫式部母同惟規嫁左衛門権佐宣孝産二女
  - 女子　賢子宣孝長女也号大貳三位嫁太宰大貳高階成章為後一條院御乳母
  - 女子　号辨局為後冷泉院御乳母

明治廿七年十二月七日印刷
同　年　同月十一日發行

版權所有

校正者　東京市小石川区竹早町十三番地　鈴木弘恭
發行者　同　小石川区大門町廿五番地　青山清吉
發行兼印刷者　同　京橋区南傳馬町一丁目　青山三七郎
關東賣捌所　京橋区南傳馬町一丁目　吉川半七
關西賣捌所　大坂市南区心斎橋南一丁目　松村九兵衛
發賣所　東京日本橋区通三丁目　林平次郎

大石秀